
女神と戦士と旅人と journey of norn

馬耳東風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女神と戦士と旅人と j o u r n e y o f n o r n

【Nコード】

N 5 1 9 0 Z

【作者名】

馬耳東風

【あらすじ】

勇士司令部の女戦士・ノルンに下された新たな任務。突如現れた謎の暗黒星雲の調査に向かう彼女は、前人未到の宙域、超銀河の旅に出る。

戦士として、旅人として、運命の女神の名を持つ者として、新たな出会いと戦いの幕が明ける。

勇士司令部

M78星雲。遠い昔に太陽を失いながら、光が絶えない神秘の世界。その中心に位置するウルトラの星。ここに建設されているプラズマスパークタワーは、この銀河の太陽となり、あらゆる惑星に光を降り注ぐ。故に、宇宙の民はこの星を「光の国」と呼んだ。

光の国の住人は太古の昔、プラズマスパークのエネルギーの直撃を受け、超人の姿へ変貌を遂げている。それは、本来の生命の進化とは違うものだった。失われた太陽の自らの手で再現する行為に対して、神が進んだ科学力への奢りと慢心に対して放った罰であると彼らは考えた。人々は、永遠の光と引き換えに、超絶な力と生命を得たのだと。それは自然の摂理、宇宙のサイクルから大きく逸脱する存在で、生命体と言うには、あまりに過酷な存在意義であった。彼らは、その存在理由を求め、この力を他の生命の営みを守ること、再び世界の一部になろうと結論付けていく。宇宙には、彼らのような超人のほか、怪獣という超生命体が存在した。彼らは自然サイクルから外れ、相いれない価値観で弱い生命を脅かすことが多々起こりえる。その調停のために、この力を行使しようというのだ。あくまで、その星の人々が望む範囲の中で。

そんな理想を掲げ、彼らが組織したのが宇宙警備隊や銀十字軍、宇宙科学技術局と言った組織であり、それらが体系づけられ、訓練を受けた者たちは広大な宇宙へ散らばり、その存在の意味をなすために旅を続けている。

そんな彼らの故郷である、光の国。その名の通り、あらゆるものが眩い光を放ち、たんぱく質で構成されるような普通の人間の目ではその姿を見るところか、視力を奪われかねないほどの光がすべてに溢れている。そんな街にそびえ立つ、全長は想定できないほどの建築物である光の神殿の一室では、二人のウルトラマンが向き合っていた。一人は、頭部に巨大な角を備えた、宇宙警備隊大隊長のウ

ルトラの父。もう一人は、胸にスターシンボルが輝く、宇宙警備隊長のゾフィーだ。宇宙警備隊は、限らない星に戦士を送り込んで、混沌の調停を行う戦士を派遣する部隊である。ゾフィーはその指揮官として辣腕をふるっていた。ウルトラの父もまた最高司令官の立場にはあるが、名誉職的なもので、あくまでゾフィーらの顧問の立場であり、普段は光の国の行政に携わっている。そんな二人が他の誰も同席させずに、二人だけで話し合うこと自体異例のことであった。それだけ、彼らの会話の内容が重要な案件であることが、この状況だけでも十分に窺い知れる。

「ゾフィー、報告は聞いたが、やはり緊急を要するか」

「発見から間もないことですが、あまり放つてはおけません。突然発見された暗黒星雲と言うのは異常事態です。早急に手を打つ必要がありますが、アナザースペースからの攻撃で、この星の防衛網のせい弱さが露呈しています。監視の意味も込めて、何か策を講じる必要もあります。この星の安全も考慮に入れなければなりません」

「派遣先の様子が全く分からないというのが非常に危険なことであるのは、セブンやゼロの一件でも明らかだ。ましてや、今回発見されたエリアは、ボイドと思われる地域だ。そうになると、今度はどれだけ広大な未知の宙域を担当するのかもわからない」

深刻な様子で話しこむ二人の下に、もう一人のウルトラマンが姿を現した。元・宇宙科学技術局のヒカリである。数少ないスターシンボルの受勲者で、しかも彼は科学者としてその栄誉を手に入れたことでも、その優秀さがよくわかる。現在は宇宙警備隊に籍を置くほど戦闘力が高いのだが、高い教養は今でも重宝され、科学技術局の仕事も並行して行うことが多い。ヒカリは、ゾフィーの横に立ち、一礼すると話を始めた。

「お待たせしました。私が回収した物質の分析が終了したのでお知らせいたします。この物質にはディファレーター因子にきわめて近いものが含まれていることが判明しました」

「では、そこには我々のような存在がいるというのか」

「そこまでは断言できません」

彼らが言うディファレーター因子というのは、プラズマスパークに含まれる未知の宇宙線で、彼らを超人に変え、生物を怪獣に変えさえもする恐ろしいものである。彼らはウルトラマンになることはできたが、線量のバランスによってはどんな姿になっていたか想像もつかないのだ。

「この因子は、微妙なバランスによって変化が起こります。それに似ているというだけで、性質が同じともいいかねます。また、気になる点がもう一つ。この宇宙にはどうも未知の物質、ダークエネルギーと思われるものがあるようです。別に毒になるものではないと思いますが、このような物質が存在するとすると、任務に支障をきたす可能性もあります。未知の危険が漂う地帯と言えます」

「そうになると、やはり複数体制であたらせねばならないな」

大隊長であるウルトラの父はぽつりと漏らした。しかし、人員を割くと簡単に言っても、今の光の国で宇宙警備隊の人員の派遣地を整理するのは非常に困難なことである。短期間に光の国への直接攻撃を続けざまに受け、その修復や警備体制の見直し、宇宙の治安維持の本丸が攻め込まれたことでよからぬことを考える勢力が活動を活発化させているためだ。本陣である光の国の防衛と、各地への治安維持のための派遣は非常に組織の体力を消耗し、新たな宙域への人員配置など、非常に困難なことであった。

しかし、あげられた報告では、新たに発見された暗黒のガス雲が漂う宙域の近くでは、異常な数の怪獣が発生しているという報告があり、この区域が非常に危険なバランスの中にあることは明白だった。戦闘にならなくとも、調査や監視をするものが必要である。

「大隊長。勇士司令部を使いますか」

「確かに、これだけ危険度の高い任務を単独で当たらせるとなると、最も適任なのは、あの部署しかあるまい」

彼らの話に上っている勇士司令部とは、宇宙警備隊の一つの部署だ。一般隊員と違うのは、その戦闘力である。訓練生時代からの優

秀なものが候補となり、さらに実戦で功績をあげたものが配属され、戦闘力の高さは、一般隊員の三人単位に換算されるほどであると言われている。また、様々な環境や政治体制、文明の発達度に適応する高い教養も要求され、単独で行動する上での判断力も重視される。言ってみれば、単独で危険な任務をこなし、どんな星でも適応して事件を解決する能力を持つエリート部隊だ。

今回のように、安全があまり保障されない未開の宇宙というもの、勇士司令部が適任と言える土地だ。しかし、国防に不安があるこの星の現状では、勇士司令部の構成員も貴重な戦力で、簡単には動員できない事情がある。

「今回の任務では、一番適正があるのはあそこで間違いないだろう。しかし、これだけ国防に隙があると、彼らもまた安全保障上の重要な一員だ。長期任務にあたるものはいらるだろうか。ネオスはオリオン座系の宙域に向かわせているから無理だろう」

「では、現在は休養中、非番のものを当たらせてはどうでしょう。

非番の者は防衛網の構想に入っていないません」

「それはいいが、この難しく危険度の高い任務を任せられる者がいるのか」

「大隊長。ノルンがいます」

ゾフィーの推薦に、父もヒカリも動揺を隠せなかった。一つの任務に就かせる人員の推薦や任命の場に就いたことは、彼らのキャリアからいえば少なくない経験であるし、むしろ見慣れた光景と言える。しかし、彼らが動揺を隠せないのは理由があった。なぜなら、ゾフィーが推薦したノルンは、彼の娘に他ならないからであった。

「ノルンであれば、この任務には不足はないでしょう」

「ゾフィー、お前の推薦通り、ノルンであれば勇士司令部の中で今は任務に就いておらず、戦闘力や知力から言っても申し分はないであろう。だが、任務の性格上、もっと慎重に考える余地はある。それに、お前はこの危険な任務だからこそ、敢えて自分の娘を送り込んで、私情は任務に一切はさまない姿勢を見せようとしているので

はないか。そうすることで、他の隊員たちに余計な考えをさせないように、無理をしているのではないだろうな」

「大隊長、私を、いえ、我々親子を見くびらないでいただきたい。あくまで、我々は隊長と隊員の関係、これはこの職に二人同時に就いている限り変わりません。それは、ノルンがこの仕事を選んだときに誓ったことです。私は隊長として、最もふさわしい者を選んだ、ただそれだけです。そのことは、大隊長が一番理解しているはずですよ」

「それを言われると痛いな。反論はできん。わかった。では、勇士司令部のノルンに新たな任務を与える。この任務は、私も立ち会って任命をする。ヒカリ、ノルンを探して、光の神殿に来るように伝えよ」

「わかりました」

ヒカリは部屋を出て、ノルンを召集すべく行動を開始した。ゾフィーは壁が透けて見える窓に立ち、光にあふれる街を眺めていた。何を考えているのかは、その顔から察することはできなかったが、隣にウルトラの父がずっと並び立ち、ゾフィーに静かに語りかけた。「すまん、ゾフィー。私としても、ノルンが今使える状態にあることは知っていた。だが、父であるお前を目の前にするとそれを言い出せなかった。お前に苦しい発言をさせて悪かった」

「やめてください。私は、隊長として人員を指名しただけです。本当です。ただ、肉親を戦場に、自分の命令で送り込むつらは、大隊長も同じですし、私もその現場を見ていました。だからこそ、私も同様の状況になったときは、大隊長と同じ行動をしようと覚悟を決めていましたのです。それが、今訪れたに過ぎません」

「お前とノルン、本当に強い親子だな。私は息子にそこまで厳しくなれなかった。お前を始めたする隊員を、すぐに救援に行かせてしまったからな。私は甘いのだろう」

親子の悩みを共有する彼らは、力なく笑っしかなかった。

ノルン、再び

広大な空間が広がる建造物。どこに天井があるのか分からない程高くそびえたつこの建物の中で二人の巨人が対峙している。一人は深紅の体の巨人で、腹部に自身の出自を現す紋様が浮かんでいる。もう一人は、銀色の体に赤のライン、そして赤いラインに沿って、新しく後から生まれたと思える違うカーブを描く青のラインを備えた頭一つ背の低い巨人、ノルンが向き合っている。

ノルンは、宇宙警備隊の中でも珍しい女性隊員である。それだけでなく、宇宙警備隊でトップクラスの実力を持つ勇士司令部に所属するという変わり種であった。もっとも、その変わり種は、宇宙警備隊長であるゾフィーの娘という由緒あるエリート血統でもあるのだが。

訓練を首席で終え、最初の大きな任務がバット星人によるウルトラの星の侵攻事件だった。長い間、直接攻撃を受けてこなかったウルトラの星は、電撃作戦を展開された上に防衛網を突破され、バット星人の部隊がウルトラの星の寸前まで迫っていたのだった。この戦いで多大な功績をあげ、星を守った戦士は、まず一人がエースであった。多彩な光線技と破壊力を誇る彼は、前線を一気に押し上げ星の防衛ラインを立て直した。彼はこの後、正体不明の異次元人・ヤプールの侵略を担当することになる。

そして、前線のその先にいる戦場で功績をあげたのがノルンだった。首席卒業という勲章はあったがほとんど実戦経験のない女性隊員と言うことで、敵の執拗なマークにあったのだが、それを苦にするどころか返り討ちにし、何体もの怪獣を相手にしても負けることがなかった。この戦いでの功績と戦闘力、訓練時代に発揮された知性を買われ、最も過酷で栄誉あるエリート部隊勇士司令部に配属されたのである。そして、多くの宙域で活躍を繰り返し、直近では惑星グリーゼで大規模侵略を食い止める活躍をしたのだった。この任

務でどういう体験したのかは多くを語らないが、人格や能力、肉体に変化を遂げた彼女は、以前より一層注目されていた。

ノルンは、グリーゼの任務の後、休暇を与えられていた。休息や余暇に時間を費やすことももちろん行っただが、次の任務に備えた準備も怠っていない。この日も、格闘術の鍛錬のために、訓練所の施設を借りて、実戦形式の組み手を行っていたのだ。

じつと向かい合う赤い戦士とノルン。体からにじみ出る闘志と緊張感、殺気は、まさに戦場のそれである。ジワリジワリ間合いを詰め会う二人の目は、互いの隙を探り合い、限界まで間合いを詰めた二人は、膠着を保てなくなり、ついに体がぶつかり合う。拳が交差するが、互いに防御技も繰り出し決定打を与えない。蹴りを見舞うが、堅い防御が衝撃を和らげる。力強く素早い攻撃を互いに繰り返して、二人は戦い続けた。やがて、互いの拳が激突し、衝撃が二人の体を引き離す。ノルンはこの力を利用し、体に素早く捻りを加えながら飛翔し、両足にエネルギーを込めて赤い戦士に蹴りを繰り出した。赤い戦士は両腕で防御を固め、ノルンの攻撃を正面から受け止める。ノルンは、相手の足が激突した後も、両足を高速で動かし、機関銃のように蹴りを降り注いだ。次第に防御の腕を押され始め、赤い巨人は危険な状態にあつていく。その時、

「それまでっ」

という鋭い声が間に入り、二人は瞬間的に相手から離れ、緊張を解いた。すでに、そこには程良い張り詰めた空気と和やかな空気が生まれている。

「さすがだ、ノルン。もう簡単には勝てなくなった。むしろ、油断するとこっちが危なくなる」

「いえ、これはあくまで訓練です。実戦と訓練は違いますので、こういう緊張感あふれる訓練が必要なのですが、相手がなかなかいないのです。訓練生を使うわけにはいきませんし、任務中に当たっている隊員を捕まえるのは論外です。貴重なお時間を私の訓練に付き合っていただき、ありがとうございました。マスターアストラ。」

そして、マスターレオ」

マスターの称号付きで呼ばれた二人の赤い巨人は、レオとアストラだった。彼らは故郷をなくし、難民に一時なっていたが、今はキングという後見人とその強さを買われ、宇宙警備隊の任務と同時に格闘の技術を訓練生に伝えている。だが、彼らの戦闘レベルは非常に高く、本格的に腕を磨くためには、実戦を積んだ上で、着任後も長い期間訓練を受けなければその神髄をつかむことはできないといわれている。その格闘術のいわゆる免許皆伝の域まで達した者の一人がノルンであった。レオはノルンに近寄ると肩に手を置き、一回り小さい彼女を頼もしげに見つめて語りかける。

「なかなかこの域まで宇宙拳法の真髄に近づく者はいない。メビウスは最低限のことしか教えられなかったし、ゼロは免許皆伝だが精神面に幾分不安が残る。まあ、お前の場合は、体格面や体力面でどうしても小柄な分ハンデがあるが、どうも前回の任務で、妙な型を身につけたようだな」

「はい。ある剣士に教えられたのは、無理に攻めるのではなく強固な守りを固めて相手の崩れるのを待つこと。そして、旅の途中で出会った方に、闘気で戦うのではなく、すべての者を慈しみ包み込む愛によって成り立つ心で、悪意や敵愾心を解いていく型を身につけることができました」

「なるほど、確かにアストラの攻撃は、力ではお前を上回ってもすべて受け流され、それによって戦う力が削ぎ落とされていた。どういう体験かを聞いても、教えんだろうな」

「私だけの大切な体験にしたいので」

「まあ、そういうこともあるだろう。それに、前回の任務から帰ってから、肉体もそうだが、お前の性格も変わった。ギスギスしたというか、冷徹な雰囲気が消えて、温かさや柔らかな光を放っている」

「そうでしょうか。私には実感できませんが、滞在任務によって得られるその星の人間の影響や、積み重ねた経験値がそうさせるのかもしれません」

「言葉遣いなどを聞くと、女らしくなったぞ。おっと、それと言っ
てはいけなかったな。すまん、取り消す」

「いくらマスターでも言っただけじゃない言葉があります。でも、わ
かっていただけのなら、それで構いません」

三人で、実戦練習の結果や雑談などをしていたところに、深紅の
戦士が部屋に入ってきた。この部屋では、様々な空間設定ができる
ので、部屋の入り口は見えないが、戦士がスイッチを入れると、光
で覆われた空間に戻った。

「楽しそうなところをすまないが、そろそろこの部屋を空けてほし
いな。訓練生の授業が入っているんだ」

「すみません、タロウ教官」

宇宙警備隊訓練生の教官であるタロウは、ノルンより少し上の世
代である。そのため、ノルンにとってタロウは、訓練生時代の目標
や憧れであり、さらに宇宙警備隊大隊長の父、銀十字軍の母をもつ
彼のことをとても他人事とは思えない親近感と、尊敬の思いを抱い
ていた。

「もう十分訓練はできました。すぐに部屋はお返しします」

「ノルン、お前はどこまで強くなりたいんだ。勇士司令部が強さを
最低条件にされるのはわかるが、頭も一流でないとダメなところだ。
知識の方も訓練しておくんだぞ」

「はい、教官。では速やかに退室します」

「いや、お前に辞令が下った。すぐに光の神殿に迎え。そこで、大
隊長と隊長の二人から、任務が伝えられる。すぐに向かえ」

「隊長も同席……、そうですか。わかりました、ただちに出頭しま
す。マスターレオ、マスターアストラ、ありがとうございました。
教官、失礼します」

礼儀正しくノルンは挨拶をすませると、足早に神殿へ向かってい
った。確かに血筋に裏打ちされる能力と人間性に、三人は彼女を認
める他はない。

「単独任務が多い勇士司令部じゃなければ、あいつもウルトラ兄弟

に認められてもいいんだが。レオ、ノルンに今度は何を教えたんだ」
「実戦型の組み手と、奥義を伝えた。そして、それを飲み込んでしまったよ」

「素質と完成度ならゼロで間違いない。それは確かだ。精神面の安定度と神髄への到達度ならば、ノルンの方が高いはず。あれで、もう少し可愛げがあると、愛嬌が出て完璧なんだが」

「そうなのが、あいつが一番怒る言葉だ。女ということを押しつけたり、蔑んだり、型にはめようとする、誰でもかまわず噛みつきに行く。多分、俺達にでも殴りかかるだろうな」

「母がいない分、女性と言う者の姿に、神経質になっているのかもしれないな」

両親が健在なタロウにとっては、ノルンの抱えるコンプレックスはまるで理解しきれないものであるし、両親ともこの世にいないレオ兄弟にとっても、すべてを共感できるものでもなかった。

ノルンは光の神殿にたどり着くと、最上階に向かい、大隊長達がいる部屋に入って行った。二人とも部屋の奥からノルンを見渡す場所におり、ノルンは二人に形式を守った挨拶をする。

「勇士司令部ノルン。召集に応じ、出頭しました」

「わかった。こっちへ」

ゾフィーとノルンは、一瞬だけ目があつたが、お互いにすぐに目をそらし、上司と部下という態度を保つ。あくまで、職務上の立場を貫く二人の間で、ウルトラの父は自ら話すことで息苦しい空気を打ち破ることにした。

「勇士司令部構成員ノルン。君に新たな任務を課すことになった」

「承知しました。それは、宇宙警備隊の任務ですか、それとも特務任務ですか」

「後者だ。人員を割けないという事情もあるが、それ相応の力を持つものでないと危険が大きいからだ」

「了解いたしました。その任務の内容は」

「その点は、隊長から説明してもらおう。ゾフィー」

父と娘である彼らは、今は上司と部下という関係に徹し、誰の目にもそうとしか思えない態度で向き合っていた。仕事には情は一片たりとも持ち込まない、彼ら親子の不変の鉄則であり、プライドであった。しかし、会話が続くにつれ、その会話形式が変化し始める。「恒点観測員からの報告で、これまで銀河がないと思われていたボイドに、暗黒星雲が突如現れた」

「暗黒星雲が突然できるというのも、妙な話ですね。誰かが意図的に隠していたか、発生させたか」

「推測の域を出ない以上、結論は出せない。だが、この暗黒星雲の中には、どうも銀河が存在するらしい。ガスを突き抜ける観測機を突入させ、1000機使つてようやく一機がそれを観測した」

「それはすごいと言っておきます。でも、それでは勇士司令部の者を引っ張りだすまでもないでしょう。まだ、観測員の仕事じゃありませんか」

「勇士司令部を使うのには理由がある。暗黒星雲がある宙域に怪獣が突如として大量発生したこと。こうなると、中の銀河に怪獣も潜んでいる可能性もあり得るが、どれだけの戦闘力があるか分からない」

「向こうにいる敵がどれほどの数か、戦闘力がわからないとは、勇士司令部らしい派遣先ですね。骨のあるのもいそうですし」

「威勢がいいな。もう一つは、観測不可能で未知の宙域である以上、生半可な戦士では対応できないからだ。放っておくのも一つの手だが、そうするとそこがベリアルのような人物の巣窟になる恐れがある。先手を打つためだ」

「実はこっちが後手かも知れませんが、了解しました」

ノルンの受け答えは、部下が上官に対して言う口調にしてはやや強気すぎるくらいがあるのだが、それでいて、親子だということを感ぜさせない一種の壁、ルールのようなものも確かに存在する不思議

議な空気が漂っている。らしい受け答えだと、大隊長は心で思いながら、自らノルンに対して、正式な命令を与える。

「勇士司令部ノルンに命令する。ボイド地帯に現れた暗黒星雲、並びにその内部にあると思われる宙域の捜査にあたれ。もし、介入が必要な事態があれば、適時対応せよ。ただし、歴史に介入するような深い関与は除く」

「了解しました」

「では、私は他の案件があるので、先に失礼する」

大隊長はそう言い残すと、部屋を後にした。そこに残ったのはゾフィーとノルンの二人だけである。二人きりになると、鉄の様に硬くつまた勝った二人の間の空気は、幾分和らぎ、温もりを取り戻す。

「ノルン、大丈夫か、今度の任務は」

「大丈夫なんて最初から言いきれる任務なんてないでしょ、お父さん。いえ、隊長」

「今でも、お前が勇士司令部、いや、私と同じ職務である宇宙警備隊と言うのがしっくりこない。娘を戦場に放り込むということもな」

「それは言わない約束。特別扱いしたら、隊長としての信頼もなくなる。私は簡単には死なないし、死ぬ気もない。だから、そこいらの男には負けないほど鍛えてきたし、強くなった。勇士司令部の看板を汚すことはない」

「無事に帰ってこい。そして、私に報告書を渡せ。これは個人的な命令だ」

「わかったから。いえ、わかりました」

「危険な任務だから、ヒカリの所に行って装備を受け取れ。備えをしておくにはし過ぎることはない」

「それでは行ってまいります、隊長。……、お父さん」

ノルンはそう言い残し、部屋を出て行った。ゾフィーは、部屋にたった一人残り、ノルンが最後に残した言葉を噛みしめていた。

「お父さんか。私が隊長と言う地位になれば、セブン達のように親子らしく振る舞えるのだな。私達は、互いに不器用すぎるな。」

どちらかが死ぬ以外で、早く父親と娘の関係に戻りたいものだ」

ノルンは、ゾフィーに言われたとおり、ヒカリの元を訪れていた。科学技術局と言う知識層であるヒカリは、ノルンのために装備の開発と支給を担当することになっている。まず、ヒカリはノルンに一つの指輪を渡した。

「これは、お前の変身アイテムになるのは今までと変わらない。だが、より低出力でも変身を可能にしている。ダークエネルギーが変身に影響を与えることになったとしても、これなら今までより少ない時間のチャージで変身できる。ただし、ビームなどの武器には使えない」

「武器に使えないというのが気にいらないな。未知の土地に行くのに、丸腰で潜入するのは、さすがに怖いし」

「もちろん、それに対応する物がある。それが、このライブブレスレットだ」

そういうと、ヒカリは一つのブレスレットを取り出した。金を基調とした美しい外見で、ノルンがそれをはめれば一層映えるだろうと思えるほど、美しい輝きを持っている。

「ブレスレットなら持ってるけど」

「それは武装ブレスレットだろ。これは、武器には全く使えないが、潜入先で必要なキットが仕込まれている。たとえば、さっき話した武器だが、ブレスレットにシャインブラスターが内蔵されている。

威力は強いから護身用から強襲用の武器にまで用途は広いが、連射はできないからな」

「武器があれば、機能はともかく心強いわね。他にはどんな能力があるの」

「これは、その星の服装に合わせる機能がある。お前は、どうも溶け込むという行為が苦手らしいからな」

「余計なお世話。溶け込むといえど、お金が必要でしょ。それはな

んとかならないの」

「宇宙警備隊が通貨を偽装するわけにはいかんだろう。それは自分で調達しろ」

「はいはい、わかりました。その鉱石は何なの」

「これは特殊装備だ。セブンの持つているカプセル怪獣やボール怪獣、あるいはレイオニクスのバトルナイザーの機能を応用したものだ。ここに怪獣を収納できるんだが、もう一つ別の機能があって、普通の生物もディフレクター因子で我々に近い能力を持つことができる。ただし、その生物の同意がないと、変異はもちろん、収納すら不可能だが」

「魅力的だけど、そんな都合のいい生き物がいるかしら。だけど、このブレスレットはかなり使えそう。ありがとうございます」

最後だけかしこまったノルンは、さっそく右腕に新しいブレスレットを装着する。やはり、美しさと力強さが備わっているノルンが装着すると、輝きが違って見えてしまう。

「ノルン、できればお前のその青いブレスレット、コスモブレスも調べてみたいんだが。お前、そのブレスレットの入手経路を報告書で上の方にあげていないだろ」

「これはだめ。私の宝物だから」

「私の宝物なんてセリフを言うような柄でもないだろう。どうしても気になってな。この宇宙の鉱石や製法にも見られない構造だ、興味がある」

「その内に」

荒っぽい任務が多い部署にいるため、ヒカリのような理系畑の人間に対しては、ノルンは本来持つているぎくばらなところが丸出しになる。上下関係をあまり気にしなくていいからだ。ノルンは未練がましいヒカリの視線を適当にあしらって、部屋を後にした。装備も受け取ったし、後は旅立ただけだ。任務による旅立ちは何度も経験があるが、やはりいつも不思議な思いが内心にある。いつ帰るかわからない、もう帰ってこれないかもしれない、そう思うと

自分の目に故郷を焼き付けておこうと、いつもより念入りにあたりを見つめてしまうのだ。旅立ちを繰り返す度に記憶してきたことで、完全に頭の中に風景が刻み込まれているはずなのだが、どうしても習慣を繰り返してしまう癖があるのだ。

「次はいつ帰れるんだろう」

ふとそんな言葉をもらしながら、発着地点となるエアポートまで行くと、そこには先客がいて、ノルン同様に出発を控えているようだ。その後ろ姿に見覚えがあったノルンは、少しばかりいたずら心を出して、気配を消して近づき、その人物の後頭部を軽く叩いた。

「痛っ。誰だ、こんなことをするのは……。あ、ノルン先輩」

「隙が多すぎ。もし戦場なら、もう死んでるよ、メビウス」

悪戯の相手はメビウスだった。宇宙警備隊の訓練所の中で、メビウスはノルンの少し下の世代になり、後輩ということになる。メビウスにとっては、ノルンは首席卒業と言うまぶしい存在であり、憧れの念も抱いており、ノルンにしても昔から素質の片鱗を見せていたメビウスは、非常に気になる後輩であった。

「光の国でも隙を見せるなって言うなんて、相変わらず厳しいですね、先輩は」

「勇士司令部は、隙を見せるとあっさり死ぬ様な任務ばかりだから。あなたもこれから長期任務に出るの」

「はい。マゼラン星雲の監視です。ベリアル事件以来、惑星間弾道弾が配置されたりと、きな臭い雰囲気があちこちに漂っていて、あの一帯も過剰な防衛反応を見せているので、微妙なバランスになっています。それで、監視をしておくのに越したことはないだろうということと、関係ない星に被害を及ぼさないようにと言う適時介入の命令が下ったんですが、適時と言うのが頭を悩ませます」

「それは、あたしも一緒よ。要は、その星の選択や歴史に関わることは介入するなっていう大前提があるわけだけど、それを逸脱する事態っていうその判断がね。まあ、無関係な人が理由もなく苦しんだり悲しんだりするような事態が生じたら、その時は手を出そう

かなってという判断はしているけど、こればかりは経験を重ねないとね」

「本当に難しい問題です」

「でも、だいぶ前にあなたは地球という星で、他人の星で生きること、その星の人々を理解することを学んだから、それを生かせばいい。あたしは、つい最近だから。一つの星に長期間滞在して、色々な経験を積んだのは。それまでの、戦闘行為だけの経験より、ずっと実りがあつたわ」

「たしかに、そのせいなのか、先輩も雰囲気が変わりましたね。言葉づかいも違いますし、冷徹さが和らいで、なんというか優しさが表面に出ていると言うか。何だか女性らしく……」

「メビウス、今あなた、最後に何か言いかけなかったかしら」

「……。いえ、気のせいです」

「ならいいけど」

メビウスは危うく、言うてはいけないことを言うところだった。

ノルンは、女性と言うことを押しつけられるのを非常に嫌う。蔑視する表現はもちろん、女らしい、女っぽい、そういう褒め言葉ですら嫌う。男の中でもまれ、それを上回る功績を上げるためには、男性に負けない人並み以上の努力やつらい鍛錬があつただろうし、顔も知らない母親に対する憧れともコンプレックスともつかない複雑な感情を抱き続け、その結果、異常なほどに女性らしさという型にはめようとする言葉には過敏に反応する。場合によっては鉄拳も辞さない程で、訓練生時代や宇宙警備隊の中ではもちろんのこと、猛者揃いの勇士司令部でもその拳の犠牲になった者は多く、能力は高いが揉め事の多い超エリートと言う複雑なキャリアをもつ。彼女が女性でありながら「ウルトラウーマン」ではなく「ウルトラマン」を自称し、周りからも呼称されるのも、彼女の意地と、それが引き起こした武勇伝のせいである。

しかし、メビウスの指摘通り、ノルンの人間性に変化が見られたのは事実である。ノルンが以前のグリーゼの任務から帰って以来、

皆から言われることであつた。冷たさが消え、温かさがにじみ出て、言葉遣いにまで表れていると。ノルン自身にそんな自覚はないのだが、様々な経験を重ねるうちに、知らず知らずのうちに人間性を変え、るほどの学習をした結果なのだろう。

「それ、みんなに言われるんだけど、あたしには自覚がないの」

「すぐく印象が変わつて、素敵だと思いますよ」

「長期滞在をすると、あなたのお世辞みたいな言葉も言えるようになるのね。そんな変化は予期も自覚もしていなかったけど」

「お世辞じゃないです。ところで、ノルン先輩の派遣先はどこですか」

「最近発生したらしい、暗黒星雲。ボイドに暗黒星雲がいきなり登場するはずはないんだけどね。それだけ、怪しいってこと」

「危険な任務になりそうですね」

「勇士司令部に安全な任務なんてないわよ。さあ、お互いにもう出發しましょう。メビウス、あなたは今や頼れるエースなんだから、そこを自覚しなさいね」

「わかつています。ウルトラ兄弟にまで列せられる名誉をもらっている以上、それに恥じない活躍をしないとイケないですから。でも、先輩の実力なら、ウルトラ兄弟入りは絶対なのになあ」

「いやよ。兄さん兄さんなんて呼び合う汗臭いところに入るなんてそれに、あたしは、実の父親を兄さんと呼ぶ複雑な状況になるのよ。ゼロなら、あの性格だから親父とか、兄貴とか、呼び捨ても平気だろうけどね。あなたにだけ言うけど、あたしにとっては隊長と呼ぶのだって、本当はしつくりこないし」

「そうですね……」

ノルンが普段は誰にも言わない複雑な親子関係のことを口にできるのも、メビウスを可愛がつている証しである。この後輩は、人の悩みや悲しみを包み込み、その感情を共有する優しさによるものだ。「そういうことだから、ウルトラ兄弟入りは却下ね。さあ、出發しましょう」

二人は同時に飛び立ち、光の国の外に出た。途中まで並びながら飛び、それからそれぞれの任務先に向かって別れることになった。

「それじゃあ、メビウス。お互いにまた無事な姿で、あの故郷で出会うことを約束しましょう」

「はい、先輩。お氣をつけて」

メビウスの姿が視界から消えるのを見届けると、ノルンも亜光速にまで加速し、指令を受けたポイントまで急行する。周りの星が光の線となり、様々な色と太さの絵を見ているようだ。指示されているかつてのボイド宙域は光の国からはそれなりの距離がある。亜光速でもまだ時間がかかるため、ワームホールを形成するトゥインクルウエイを発動し一気に距離を詰めていく。やがて、彼女の視界に光の向こうに黒い点が見え始めてきた。発見されたという暗黒星雲だろう。ノルンは制動をかけ通常空間の飛行に戻る。

眼前に広がる暗黒星雲は、本当に突然現れ発見されたとは思えないほど巨大である。小さい暗黒星雲などないのだが、これだけの規模の物が観測されなかったなど考えられないことであつた。

「これがボイドに現れた暗黒星雲ね。でも、こんなものが突然出現するなんて驚きだね。宇宙には不思議なことがまだまだたくさんあるってことね」

これから危険な任務に挑む者とは思えない余裕ある口調で、ノルンは目の前に広がる暗黒空間を見つめている。その彼女に周りに、宇宙警備隊の隊員が集まつてきた。怪獣が頻出しているというから、その警戒に当たっている隊員だろう。

「警戒中の隊員ね」

「はい、ノルンさん。隊長よりウルトラサインであなたの任務は聞いています。我々が、暗黒星雲への突入の援護をいたします」

「ありがとう。そうしてもらえると助かるわ。でも、このガスの向こうに本当に銀河があるの」

「常識からすればあり得ないことですが、観測結果がそう示しています。並行世界と接触したりと、もうこの宇宙では何が起ころうと

おかしくありませんから、このガスの向こうに銀河があっても、驚くことではないでしょう」

「あなたとは気が合うわね。私も同じことを考えていたから。とにかく、このガスの厚さは相当のものでしょね。私の命、あなた達に預けるわ」

「責任を持つて任務を全うします。我々全員が、ガスの一か所に光線を照射し突破口を開けます。その中にできた道に飛び込んでください。ですが、我々の光線にも限界があります。おそらく途中で道は終わります」

「それ以降は、私の光線でガスを振り払いながら道を作っていくしかないってことね」

「申し訳ありませんがそういうことです。もつと人員を割ければ、安全に向こう側に送り届けられるのですが、ギリギリの人数しか揃えることができません。それに、向こう側からではウルトラサインは届きません」

「それで十分。それにこれは片道切符。帰りの便は、自力で探さなければいけないわけだから、安全なんて端からないわ。向こうに届けてくれれば十分よ」

「わかりました。では、これより行動に移ります」

警備隊員は円形の陣をとって距離をとり、息を合わせながら、同じタイミングでそれぞれの最も威力の高い光線をガスに向かって放射した。熱線がガス雲を焼き、そこにトンネルができていく。熱線の有効射程距離一杯までこのトンネルを作り、これがノルンを一定距離まで安全に運ぶ通路になる。そして、警備隊員たちの能力の限界まで光線の放射が続き、トンネルが完成する。ノルンが受けられる支援はここまでだ。

「ありがとう。ここから先が私の任務よ。あなた達も気をつけて任務にあたって」

「了解。お気を付けて」

ノルンは警備隊員に見守られながら、彼らが作ってくれたトンネ

ルに飛び込んで行った。光線の照り返しで、暗黒のガス雲の中に光の道ができる。ノルンは、隊員たちのエネルギーが切れる前に距離を稼ぐべく、全速力で飛び立つ。そして、彼らの射程距離限界の地点まで達すると、今度は自身のタキオンストリームを発射し、自力でトンネルを作っていく。トンネルの幅は一気に小さくなり、ノルンの体一つぎりぎり通れる幅だ。

「すごい密度ね。ギリギリで向こう側に着くといけど……」

ノルンの危惧するのは、光の射さない空間でのエネルギー切れである。そこでエネルギーが切れれば、それはすなわち死である。複雑な肉体の機構を持つM78星雲人の死は、救命措置をとらない場合は、完全な消滅を意味する。例え、自力で救命措置を取ったとしても、暗黒のガスの中では救助されるは不可能だ。何が何でも、ここを突破しなければならぬ危機感がある。

エネルギーが減り始め危険域に達し、胸のカラータイマーが点滅を始める。それと同時に、ガスの密度が急速に薄くなっていくのをノルンは感じ取った。いける、そう確信したノルンは一気にスパークをかけ、光線の熱量をあげてガス雲を突き抜ける事に成功する。

ガス雲の向こう側に到達したノルンは、そのまま宇宙空間に身動き一つせず、漂っている。残り少ないエネルギーを浪費しないために、体の活動を刻限まで低下させているのだ。彼女は、じつと宇宙空間の無重力に身をゆだねながら、ある物質を探していた。それは、エーテルである。

エーテル。地球では、アインシュタインの特殊相対性理論によって存在を否定された物質である。宇宙は真空ではなく、エーテルという物質が存在し、光などを伝える物質として仮定されたものであるが、M78星雲の人類がエーテルと呼ぶものは、それとは全く違うものであった。エーテル自体、非常に微量な物質で、しかもかなり不安定な性質を持っていて、すぐに他の物質に干渉されて、姿を変えてしまったため、観測が難しいものだ。

しかし、78星雲人はエーテルを自身の体に取り入れコントロール

ルすること、他の物質に変化しやすいエーテルを利用して、あらゆる宇宙線を彼らの故郷に降り注ぐプラズマスパークと同質のものに変換する技術を身につけることができた。これにより、あらゆる環境で活動するためのエネルギーの供給源であるタイマー手術と、このエーテルコントロールによって、ウルトラマンはあらゆる星で活動を可能にする。カラータイマーからのエネルギー供給は有限であるが、エーテルコントロールさえ身につければ、エネルギー源はエーテルさえ存在すれば無限である。そのため、極寒と灼熱の空間が点在する真空の宇宙空間では彼らの能力は絶大なものになり、濃厚な大気中でエーテルが存在しない惑星では活動時間が非常に短くなる。エーテルの性質の違う並行宇宙に行けば、エネルギー源の問題はさらに致命的になる。

ノルンは微動だにせず、五感だけを研ぎ澄ましエーテルを探した。やがて、微量のエーテルがノルンの体に引き寄せられ一体化していく。それと同時に、ノルンの体に降り注ぐ宇宙線はプラズマスパークエネルギーとなって体を満たしていき、カラータイマーは青に変わった。それを確認して、ようやくノルンは活動を再開し、体を伸ばす。

「エーテルくらいはあると思ったけど、なかったら赴任早々遭難だったわ。それにしても、どれだけ広い銀河なの。これまで観測されなかったなんてありえない」

ノルンの目の前に広がる銀河はあまりに広大だった。以前赴任したグリーゼも未知の銀河にあり、そこは広さを感じたが、それとは比べ物にならない広さで、複数の銀河が一緒になったとは思えない広さと星の数であった。

「太陽の数も多いということは、生物の存在するところや、知的生命体が文明を築いている星もあるはず。これは、ただの調査で終わらない。どんな奴が潜んでいるかもわからないし、危険のにおいが充満する、勇士司令部にぴったりの場所ね。……、いいわね、燃えてくるわ」

くぐった修羅場の数のせいか、ノルンには過酷な場所に待ち受ける任務に臆するより、むしろこのような状況になると、血が騒ぐ性質になってしまっていた。決して、トラブルを歓迎しているわけではないし、できれば避けたいのが本心だ。だが、無意識の内に冒險できるスリルがあった方が、任務に対する真剣度も変わってくるのである。ノルンは、堅物に思われがちだが、実のところは血の気が多い性格であるようだ。

ノルンは、一先ずは最初に訪れるべき星を探し始める。手がかりも何もない以上、文明や生物がいる星は、しらみつぶしにあたるしかない。そこで、一番近い太陽系にある一つの星に目星をつけた。「あの星の位置や公転速度なら、必ず生命はいるはず。おそらくは、かなり暑い星だろうけど、日の光がいっぱい降り注ぐならそっちの方がいい。さあ、いきましよう」

ノルンは、目を付けた最初の星へ飛行を始める。運命の女神の名を持つ彼女の新たな戦いと旅が始まった。

熱砂の戦士

見渡すばかりの砂の大地。太陽に光が砂にあたり、砂を熱し、光を反射させてぎらぎらさせて目を直撃する。気温は摂氏50度近くになるこの砂漠を移動する、謎の一団であつた。日中の砂漠の移動は非常に危険である。局毛の厚さが体の水分を奪い、常に脱水症状の危険が伴う。そして、遠のく意識は思考能力を奪い、目印もない場所での移動は、永久に砂漠をさまよわせることになる。

しかし、移動を続ける一団は、それらのセオリーをことごとく無視していた。肌を露出させて熱にさらし、一切の休息もとらずに歩行を続ける。さらにもっとも異様なのは、重い武装をしているのである。重い荷物は砂漠でさらに体力を消耗させる。にも関わらず、彼らは全身を鉄器で武装し、槍や剣、盾などを手にして無言の行軍を続けている。誰ひとりしゃべる者はいない。無言のまま移動を続ける一団は、死の行軍と言うより、死者の行軍と言ってよい。

彼らは、ひたすら歩き続ける。方角を見失うこともなく、ひたすら歩き続ける。すると、彼らの行く道の上に、行く手を妨げるかのように一つの人影が立ちはだかった。人影は、大勢の軍に向かって、たった一人で歩み寄り、その行軍の邪魔をする。

その姿は、短い髪形で色は深紅と言つていいほどの赤さが特徴的だった。手や足の露出度の高い衣装を身につけ、その表情は不敵な笑みを浮かべている。

「性懲りもなくまた来たね、あんた達。引き返すんなら今の内よ」その声は女のものだった。勝気な言葉と好戦的な表情は、警告の内容とは裏腹に、戦う意思が浮かび、今にも飛びかかろうとしている。指の骨をボキボキと鳴らし、臨戦態勢は整っている有様だ。

しかし、警告を無視して、兵たちは歩みを止めようとしなない。これが彼らの返答のようだ。警告を無視したと受け取った女は、その拳を彼らに向かって打ち出した。

「砂漠をも焼きつくす炎で、吹き飛びな」

その拳から紅蓮の炎が上がり、拳の形となって兵の一団に激突した。その言葉通り、彼らは炎に包まれて後方に吹きとばされた。普通であれば、これで殲滅完了である。だが、彼らの異様さは、普通を凌駕する。

異形の兵士は、炎の中で立ちあがり、鎧などが引火した状態で女に殺到していく。手には剣を抜き離し、槍を突き出して、一体多数の戦いとは思えない程の危機迫るものである。

「ちっ、あれで済むわけないよね。毎度のことだけど、しっこい連中よ」

彼女は、両腕両足に炎を纏わせて、素手で戦いを挑む。兵が振りかざした剣を腕で受け止めながらもその炎で剣を焼き、真っ赤になったそれを具に槍とへし折っていく。体につきたてられる槍は、一瞬で燃え落ち、炎の打撃は盾を貫く。まさに一騎当千の強さであるが、やはりすべての兵士を確実に仕留められるわけではない。戦いは一部の兵に任せ、残りの兵は女の背にある砂丘を超えていく。

「思ったより、取り逃しが多い。アープ、行ったよ」

女は砂丘の向こう側にいる、アープという名の誰かに声を張り上げた。丘の向こうにも、赤い髪の女同様、たった一人で兵たちの進行を待ちうける者がいた。こちらは銀髪の少し長めの髪を持ち、白くゆったりとした砂漠の民の衣装を着ている。

「アータル、取り逃しが多いわよ。本当に後先考えずに突っ走るんだから」

どうやら、赤い髪の女は、アータルと言う名らしい。そして、このアープと言う女性は、彼女が食い止めきれなかった兵をここで足止めさせる役割のようだ。砂丘を勢いよく駆け降りてくる兵士たちをじつと認めながら、その距離を測っている。兵達との距離が一定の距離まで詰められて初めて、彼女は動き出す。

指を砂に突き刺し、そこに念を送り込む。すると、砂が細かく動き出し、彼女が指を抜いた瞬間、砂の下岩盤を砕いて、水が勢い

よく噴き出した。砂漠から生まれた水が噴き出す様を見て、さすがの兵士達も足が鈍った。それだけ、砂漠で水が噴き出すことなど、あり得ないことなのだ。

アーブはさらにその水に手をかざすと、敵に向かっていきよく払った。水は空中で凍結していき、兵士たちの足元は氷に包まれた。体験したことのない氷の足場に、彼らはことごとく足を取られていく。さらなる追撃で、彼女は再び水に手をつけ、今度は氷を鋭い槍のように変えて発射していく。飛び道具も作れる彼女は、近接でも遠距離でも能力を発揮できるのだ。

だが、後方の兵士は、前方にいる者を盾にして前進を始めた。砂漠で水は無限ではない。やがて、水の勢いが衰え始める。それならばと、アーブはさらに接近戦を挑む。砂漠で最も水分を含むもの、それは人体である。彼女は、兵士の肌が露出しているところを握り、その体を凍結させていく。こうなれば、完全に相手の動きを封じられるが、一度に一人しか相手にできないため、相手をする事ができない多数が彼女の横を通り過ぎていく。

「ワルフ、予想以上の進軍です。何とか食い止めてください」

アーブのさらに後方で待ち構えるワルフ。短い髪を刈り上げ、筋肉質な肉体を誇る男性の後ろには、大きな門があり、それを超えた所には500人程が暮らす村があった。つまり、彼は村の最終防衛ラインである。

「後は任せろ、アーブ。俺の起こす嵐で、この村には絶対に踏み込ませはしねえよ」

ワルフは、アータルとアーブの二人の防衛ラインを突破してきた兵士に向かって手を突き出し、気合とともにトップを巻き起こした。風速30メートルはあろうかという暴風は砂嵐をおこし、敵の足を完全に止める。

「これで、終わりじゃねえぞ」

ワルフはその場で回し蹴りを行った。空を斬ったその蹴りの軌道から竜巻が起こり、嵐となって、敵を巻き上げていく。だいた半数は

減ったが、それでもほふく前進をしながら風をやり過ごし、ワルフとその後方にある村に向かってしぶとく前進を進める。

三人の超能力戦士と、退くことを知らない人間離れた兵士の戦い。まさに、超人同士の砂漠の戦いを高いところからじっと見下ろす人影があつた。ノルンである。

ノルンは青くゆつたりした一枚布の薄い生地服を体に巻きつけて羽織り、頭には黒いターバンを巻いて首や口元を隠している。これらの服装は、光から支給された品戦闘用のブレスレット、ライブブレスレットで召喚した服装である。

ノルンの擬態は、それほどレベルが高いものではない。異星人と交流がある者や一定以上の特殊能力を持つものが見れば、すぐにノルンの正体は判明してしまう程度のものだ。それはノルンの能力不足や奢りではない。危険な任務が多いため、高い擬態能力で正体を隠す隠密性が、擬態能力を削って戦闘力のある程度維持するか、二者択一の結果だ。正体を隠すほど擬態の精度を高めれば、あまりにも人間に近づきすぎるため本来の能力がオミットされる。ノルンはそれを嫌っている。正体はばれてもいいし、それはその後の立ち回り次第と考えているし、危険な任務地ではむしろ本来の能力をできる限り残したいという発想からだ。

だが、ノルンの発想はやはり変わり種で、少々無頓着すぎるくらいがあるため、少しでもその星に溶け込めるようにとの配慮で、ライブブレスレットが支給された経緯があつた。

しかし、砂丘にたたずむノルンの姿は小柄で、腰近くまである黒い髪を持つ美しい女性にしか見えず、普通の人間であれば見とれることはあっても、正体が異星人であるなど夢に思わないだろう。

そんなノルンの目には、砂漠の戦士たちの戦いが移っている。だが、その顔は無表情だ。なぜなら、その星の歴史に介入する事はできないからだ。あくまで、「その星の人々の裁量では裁ききれない異常事態」に助け船を出すのであって、悲しいことだがその星の民の戦争には介入はできない。戦争もその星の歴史の一部だからだ。

「悪いけど、私には何もできないから」

どこか無常観が漂う口調でつぶやきながら、ノルンはその場を去ることにする。この星に何か異常事態が起こっていないか、調べることは山ほどあるだろう。踵を返して歩き始めようとした時、彼女の目に捉えられたものがあつた。

戦いが展開される正門とは逆の裏門に向かって、砂漠の一部が隆起しながら近寄っているのだ。ノルンの目でなければ、それを捉えることはできなかっただろう。隆起はゆっくりと裏門に近づき、あと少しのところで止まった。ノルンは興味をひかれて様子を見守っていたが、その意味にすぐに気がついた。

「正面ばかりに気を取られるから。戦闘慣れしていないのね」

ノルンのその予想はすぐに当たった。砂地の中から多数の兵士が現れ、裏門を守っていたわずかな兵士を払いのけ、門を破り始めた。正面から攻めている大群は囷、裏から攻めてきた少数精鋭部隊が本隊なのだ。

「もう、知らないわよ」

ノルンの目は言葉とは裏腹に冷たさはなく、悲しみがあふれ始めている。だが、自分に与えられた使命と力は、一つ間違えれば偽善と暴力につながる。それを無視することは、優しさでも何でもない。ただの独善だ。ノルンは、それを教えられてきたし、何度も目の当たりにしてきた。やはり、自分が出る幕ではないと思おうと努めた。だが、村の中にいるのは非戦闘員である女性や老人、そして子供である。それを見た瞬間、ノルンは苦渋の表情を浮かべながら砂丘を降りて行った。その足は村に向かっている。

門を破られ、多数の兵がなだれ込む。正門に配置している男性群が来るには時間がかかり過ぎる。中に残っていた非戦闘員である女性や子供、老人はたちまち追いたてられ、一か所に追い込まれて行く。体力の少ない老人や子供は格好の獲物となり、兵達は執拗に追いまわす。母親からはぐれた子供が足を取られて転んでしまう。だが、兵士には人間の心がないのか、躊躇なく剣を振りかざし、子供

の命を奪おうとした。

その瞬間、剣をかざした兵の頭に衝撃と鈍い音が走り、彼は体をぐらつかせて倒れこみ失神した。彼の兜には大きな凹みができ、そばには拳ほどの石が転がっていた。後ろからの攻撃だと気がついた一団は、一斉に後ろを振り向いたが、そこには誰もいない。その瞬間、彼らの頭を誰かが蹴りつけながら飛び越えていく。そして、その人物は子供の前に降り立ち、子供を抱き上げて母親も途へ連れていった。その人物は子供にやさしい表情を見せ、その顔を見上げた子供は安心したかのように泣きやんだ。

「あなたの未来という運命を守るのも、私の役目だよね」

それはノルンだった。彼女は子供をあやすように話しかけると、すっかり安心した子供はノルンに微笑みかけてきた。そして、その子の母親が駆け寄ると子供を手渡し、

「決して、この子の手を離していませんよ」

と、語りかけた。母親は、言葉にならない声で礼を述べているが、ノルンは彼女を後ろに下げ、皆と一緒にいるように諭した。

そこに、ノルンの隙をついた兵士が剣を振りかざして背中に切りつけてきた。村人たちは、その後に起こることを想像し目をそむけたが、予想した通りにはならなかった。

ノルンの左腕に装着された青いブレスレット・コスモブレスが光輝いたかと思うと、連結した二本の槍、ツインランサーモードに変わり、兵士を体ごと弾き飛ばした。ノルンは穏やかな光を放つ武器を取りながら、強い意志のこもった眼で話しかけた。

「コスモス、あなたもこの人たちを助けるのが私の使命だと言うのですね。私もそう信じます」

自分の背丈以上もある槍を手にしたノルンは、兵士たちに向き直った。彼女の眼は、先ほどまでとは打って変わり、それは戦士のものに変わっている。

「さあ、あんた達。非戦闘員に手をかけるなんて、随分と非道な真似をするわね。いいわ、私が全員まとめて相手をしてあげる。歯食

いしばってかかってきな」

完全にノルンは戦闘モードである。かかってこいと言いながら、自分で兵士達に突っ込んでいく。だが、兵士たちは数を頼みにしてノルンに殺到する。どう考えても不利な状況であるが、ノルンの動きは濁流を受け流すように、華麗に柔らかな動きで兵士の殺気と勢いを殺していく。そして、相手の武器を弾き飛ばし、ツインランサーで叩き折っていく。凶暴と言っている兵士達が、ノルン一人にきりきり舞いさせられる状況に、村人たちは啞然とした表情で見つめるしかなかった。

だが、ノルンによって武器を破壊されたにも関わらず、兵士達の闘志は衰えることなく、寧ろ、闘志を爆発させて、素手で殴りかかってくる。まるで、何かにとり憑かれているようだ。攻撃を受け流し続けるノルンは、それに妙な感覚を覚え始めた。

「何だか、生身の人間を相手にしている気がしない。通常の人間の身体能力を超えている……」

見た目は明らかに普通の人間だし、ノルンの目もそれを告げている。だが、発揮してくる能力は、変身していないとはいえ、十分に常人を超えるレベルのノルンと互角に近い戦いを見せる。攻撃は受け流し続けるが、相手を沈黙させる事ができない。

手に余り始めたノルンの背後を突いて、数名の兵士が飛びかかってきた。身を守るためにやむを得ず、ノルンは槍を振るい薙ぎ払った。その時、驚くべきことが起こった。

人間である相手を傷つけないように、わずかにかする程度の攻撃だったにも関わらず、彼らの鎧が粉碎したのだ。ノルンのコスモブレスは、相手を傷つけることはない。誰かを守り、救うために力を発揮する護り刀であるゆえに、物理的な切れ味はない。心で斬るものだ。

だが、今はわずかにかすただけで、兵士の鎧を打ち砕いた。それが意味するのは、本当に討つべきはこの鎧、それを着る兵士の命を奪ってはならないということである。

「討つべき相手は、鎧と言うことね。何だか妙だけど、やってみる価値はあるわ」

ノルンは目標が定まり、戦法を変えた。槍を自分の体を中心に円を描く軌道で振り始める。その縁に囲まれることで、自分の間合いを作り踏み込ませないためでもあるし、わずかな動きで近寄ってきた相手の鎧などの武具を破壊するためである。

動かないノルンにしぶれを切らし、兵達がノルンに駆け込んでいく。ノルンはわずかに槍の間合いを前方にずらした。ただ、それだけの動きだった。しかし、槍がかすめた鎧や兜、腕当てや足当てが砕け散り、中に入っている生身の兵士の体が露わになる。鎧をはがされた兵士は、目が虚ろでしばらくふらふらした後、一回転して倒れこみ、口から泡を吹いて失神した。ただ、鎧を脱がされただけでこの有様だ。

「ふうん。討つべきは鎧、とは思っていたけど、まさか操られていただけなんてね。まあいい。ターゲットが絞れるなら、やりやすいしね」

標的を絞り込んだノルンは、華麗な動きで体を自由に操り、槍を手足のように動かして、瞬く間に鉄製の武具を破壊し、兵士を完全に丸腰にした。彼は、糸の切れた操り人形のようにぐったりと力が抜け、脱力して地面にへたり込んでいる。完全に気絶はしていないが、気力はなく、ぼーっとしており、自分の身に何が起こったか、全くわかっていないようだ。瞬く間に乗リンは、兵士を丸裸にして、完璧に沈黙させた。

ノルンは武器をしまい、村人達の方に歩み寄っていった。小柄な彼女が、自分より大きな槍を振り回し、凶暴化した兵士達を、鎧を砕きながら制圧したことを彼らは信じられず、啞然とした目でノルンを見つめている。圧倒的な強さに、村人の心にわずかだが恐怖が芽生えた。何かを要求されるのか、さらなる暴力を振るわれるのか。兵士達の横暴にさらされてきた彼らにとって、それは当たり前前の反応だった。

だが、彼女が近づいてくると、ノルンによって助けられた子供は、再び顔いっぱいに笑みを浮かべた。恐れなどない、心から信頼しているからこそ見せられる、豊かな表情だった。ノルンは、それに気がつき、自ら膝について子供の目線にあわせて話しかけた。

「もう大丈夫。泣かなくていいし、笑っていられるよ。ありがとう、私がすべきことを気がつかせてくれて」

子供に話しかけるノルンの顔にも、笑みが自然と浮かび上がってくる。それは、作られたものではない、慈愛に満ちた心からあふれ出る笑顔にほかならない。子供の笑顔を確認すると、ノルンの表情は今度は引き締まったものとなり、村人の顔を見回している。そして、彼らに、

「この村の長をつとめる人物は、ここにいるの」

と、尋ねた。最初は戸惑い、ざわざわとしたささやき声がわき上がったが、命の恩人の言葉は無視できない。群衆の中から、日に焼けた顔に白い豊かな髭を蓄えた老人が手を挙げながら立ち上がり、自ら名乗り出た。

「私がこの村の長、長老です」

彼の毅然とした名乗りに、ノルンも礼儀正しく、敬意をもって受け答えをする。

「初めまして。私はノルン。旅をしている途中、この惨状を見かね、差し出がましい行為ではありますが、介入させていただきました」

「いえ、命を助けて頂き、なんとお礼を申したいのやら……」

恩人に対する感謝の意をどう伝えるべきかわからない村長に、ノルンは気を使わなくていいと言う表情で手を差し出しながら、なんとノルンの方から要望を願い出た。

「礼には及びません。ただ、よろしければ簡単なお願いがあるのですが」

「あなたは恩人です。我々にできることでしたら何でもいたします。食料や水も提供できますが」

「ふふ、そういうのはいらないわよ。まず、この村に大きな蔵や納

屋はあるの」

「は、はあ。食料を保存する建物はございますが」

「そう。なら、その建物を空にして。次をお願いするのは、綱をできるだけ多く。まずは、これだけ揃えてくれるかしら」

ノルンの意外な注文に、村人全員が啞然とした表情で聞いている。だが、ノルンはその表情が見えないのか、それとも理解していないのか、全くお構いなしにしゃべり続ける。

「それらを準備したら、女性や子供は安全な場所に行くか、軽作業を。男性は少し力仕事をしてもらうわ」

突然の来客であり、命の恩人となったノルンの指示に従い、最初は戸惑っていた村人もてきぱきと動き始める。ノルンは、図々しいのか、リーダーシップがあるのか微妙なところであるが、完全に場を仕切っており、村の中に浸透してしまった。

そして、なぜか彼女の周りには、自然と子供が集まっている。どいう訳かは知らないが、ノルンは昔の硬派な性格の頃から子供によくなつかれていた。彼女の奥底に眠っていた深い愛情と優しさに子供は安心感を抱いたわけだが、それ以上にノルンは子供にだけは心を開き、慈愛の想いを注いできた。

優しくとても強い存在のノルンは、瞬く間に子供達の憧れの存在になってしまった。

「あなた達、どうしたの。私、何か珍しいものでも持っているかしら。……、ちょっとごめん、私、いく所があるから。だからまた後で話しましょ」

ノルンは、残念がる子供達に手を振りながら、村の正門に向かって走り出した。恩人を放っておくわけには行かず、長老もノルンの後を追う。

正門の前には、村の男が、門を突破されないようにびっしりとそこを固めている。だが、これだけの人数がいて、後方がお粗末な警備なのはいただけない。戦い慣れしていないのだろうが、弱い者を守るには致命的だ。ノルンは、まあ仕方ないかと言う思いで、

ため息をつきながら、殺気立っている集団に足を踏み入れた。

見知らぬ女が突然現れ、ノルンの姿を見たものは、警戒の色を濃くする。だが、彼女はそれにはお構いなしにどンドン門に近づく。

そこに、一人の男がノルンの肩に手を置き、前進を止める。部外者に対しては、当然の行為である。

「おい、お前は誰だ。村の者じゃないな」

「悪いけど、名乗っている場合じゃないわ。門の外は、それほど余裕はなさそうだし」

戦闘モードに入りかけているノルンは、先程までの礼儀正しさや優しさから、ストイックな状態に入っているため、男のいうことに、いちいちかまっていられない状況にある。そこに、兵士は余計な一言を言う過ち、いや、不運に見回れた。

「外がやばいだと。そんなことはわかってる。だから、村の奥に行っている。ここが女なんかがうろつく場所じゃない」

余りに不用意な言葉は、ノルンの過激な一面を噴出させてしまった。ノルンは、細い腕を伸ばし、男の喉元を掴むと、その小さな体からは信じられない力で、片手一本で男の体を持ち上げる。彼女の顔は、目にぎらぎらした光が宿り、無表情な顔が一層恐ろしさを際立たせている。

「あんた、今、なんて言った。女なんか、だと。ふざけるな。戦いになれば、力がある者は、力のない者のために戦うのは当然だ。女だから弱いというのか。その言葉、取り消せ。女の価値を決めつけるなよ」

ノルンの剣幕に、男は声を失い、必死に顔を頷かせる。それを見たノルンは、手をすぐに離し、

「わかってくれれば、それでいいわ。気をつけてよ」

と、何事もなかったように、再び門に向かって近づいていった。もはや、誰も彼女の道を妨げるものはいない。そこへ、一部始終を遠くから見ていた村長が追いつき、ノルンに対して非礼があったことを察し、詫びをいれている。

「ノルンさん、いや、ノルン様。この者に失礼があつたなら、私が代わりにわびます。……。お前、ノルン様に何をしたのだ」

「女のくせに、と言つたら、急に首を絞めてきて……」

「馬鹿者。あの方は、村の裏手にいた我々を襲つた一団を、たった一人で片づけてくださった、命の恩人だ。このバカたれが。ノルン様、まことに申し訳ありません」

長老は、地面に頭をこすりつけて、必死にノルンに詫びを入れている。それを見たノルンは、しょうがないという表情を向け、
「もういいですよ。発言を撤回して、謝罪したのだから、怒っていません。あんた、次やつたら拳が入るから、気をつけてね。それでは村長、行つて参ります」

と、言い、門に手をかけ、押し始めた。それを見た村長は、顔が青ざめ、思わずノルンの行為を止めにはいる。

「ノルン様、一体何をするおつもりですか」

「外に出るのですけど、何か」

「お待ちください。外の兵は、先程とは数が違います。我らの戦士もおりますので、あなたの手を煩わせることもございません」

「その戦士が頼りないからですよ。正直、このまま行くと、敵がここにだれ込みます。その前に、片を付けます」

「片を、つけると……」

「はい。楽勝ですので、ご心配なく。では」

ノルンの発言と自信に、尊重をはじめとする男達は、呆然とした面持ちで、門をこじ開け、外に出て行くノルンを見守るしかなかった。

ノルンは外に出ると、自らの特殊能力で嵐を越し、敵の進軍を食い止めようとするワルフに近づいていく。彼の力は、なかなか大したものだとノルンは認めているが、いかんせん戦略がなさすぎる。ここまで強い嵐を起こせるのなら、もっと前線で広大な範囲に嵐を遠慮なく起こせば、敵の前進をもっと阻める。なのに、村を背にしていては、力をセーブせざるをえない。力があるので最後の要を任

せられえいるんだおるが、思慮の浅さは要に向いていない。

ノルンはすつとワルフの隣に立った。彼はすぐには築かなかったが、黒い服をなびかせながら、平然と戦場に立つ小さな女、ぎよつとしている。

「お、おい。お前、誰だ」

「私はノルン。旅人よ」

「あぶねえぞ、引っ込んでいろ」

「そうかしら。危なつかしいのはあなた達の方よ。戦術の何も無い、力任せの戦い。その力を無駄にしている。そう断言できる」

突然戦場に現われ、戦術の講釈をたれるノルンに、ワルフは怒るところか、啞然として見つめている。言葉を失っているワルフに対し、ノルンは相変わらぬのマイペースを貫き続ける。

「あなたが突破されると村人はあっさり全滅するわよ。あなた達のためじゃなく、後ろで震えている人たちのために手を貸してあげる」

「手を貸すだと。お前、一体何者なんだ」

「だから、ノルンだって。少し、普通じゃないだけ」

ノルンは一歩前に踏み出し、右手の薬指にはめた指輪を胸にかざした。指輪の鉱石から光が放射される。光は、ただ放射されるだけでなく、軌道が完全にコントロールされ、ノルンの前後上下左右に光のサークルが生まれ、そこに光の国の文字が刻印されていき、魔法陣の様なものを形成する。計六つの魔法陣は、ノルンの体に向かって集合し、光に包まれたノルンは、銀色の体に赤と青のラインが美しく流れる光の戦士へと姿を変えた。

目の前で、一人の女性が見た事もない人のような存在に姿を変えた事に、ワルフは驚きを通り越して、呆然とし、風の力を思わず消してしまった。

「本当に、一体何なんだ、あんたは」

「少し変わった旅人。ウルトラマンノルン、その名で通っているわ」
「ウルトラマン、ノルン……」

「さあ、しっかり見ておきなさい。本当の敵を教えてあげる」

やや自信過剰とも思える言葉だが、その口調に驕りは全く感じられない。歴戦の経験から滲み出る確信と頼もしさすら感じさせ、ノルンは低い姿勢で、韋駄天の如き速さで、兵士団に向かっていった。

うごめく悪意

まさに目にも止まらぬ速さだった。華麗に、流れるような挙動でノルンは立ち回り、手刀や嘗底を撃ち込み、切れ味のある蹴りを見舞っていくが、決して傷つけるための攻撃ではない。相手の悪意を流し去り、本当に討つべきもの、謎の鎧だけを粉碎し、中の人間は全く傷つけることはしない。ノルンが身につけた、新たな戦闘スタイルである。

超人レベルまで能力を飛躍的に向上させたノルンに、鎧で身体能力を向上させただけの人間が叶うわけがなく、ノルンが兵士の群の中を風のように駆け抜けた時には、すべての鎧が崩れ去り、兵士達は全身の力が抜け、その場に倒れ込んだ。

「まずは、第一群は終了。次に行くわよ。急がないと……」

圧倒的な力の差を見せつけながら、ノルンは余裕を感じなかった。この星にきてからずっと感じていた違和感があるためだ。それは、いつになく体が重いと感じ、エネルギー源たる太陽の光が照らしつけるのに、ノルンの体に向にエネルギーが貯まらないのだ。大気圏内故に、エーテルが不足、もしくは存在しないにしても、余りに供給が少なく、力を消費する一方の状況に、ノルンは焦りを感じ始めた。

「セーブして三分、全力を出すと、一分も保たない。本当に瞬殺で行かないと」

危機的な状況に、過激な性分が顔を出し、殺意がないのに、瞬殺という物騒な言葉を口走るほど、ノルンは神経質になっている。余裕がない以上、もたもたしているわけには行かない。砂漠を駆け抜け、次の戦場に向かう。しばらく走ると、アープの姿が見えてきた。彼女は、砂漠ではあまり優位に立てない水の属性でありながら、冷静な判断で数少ない水を有効活用している。

水を固体である氷から、気体である水蒸気まで変幻自在に状態を

変え、自分に有利なフィールドを作り上げる。そして、一対一の状況に変え、不利な属性であることを感じさせない。

「やっぱり、彼女が一番冷静ね。村の近くなら、水も自由に使えるのに。でも、なかなかやるわ」

アープの戦いに感心したノルンは、同性ということと、力押しではなく、自分の持つ能力をしっかりと把握した戦法に共感し、気に入ったようだ。後ろをとられたアープの背中を守り、レイピアの力で鎧を切り裂き、敵を無力化する。

突然現れたノルンにアープは戸惑いを見せたが、その行動と佇まいに、瞬時にノルンの人間性を把握し、敵ではないことを見抜いた。「ありがとうございます。おかげで命拾いしました。正式な挨拶はできませんが、お名前をお聞かせ願えますか。私はアープと言います」

「ノルンよ。それにしても堅苦しいわね。でも、その礼儀正しさも気に入ったわ。何だか、貴女のことを気に入ったみたい。だから、助太刀するわ」

「ありがとうございます。でも、私の力では相性が悪くて……」

やはり、アープは力押しの無謀な戦い方ではない。属性と相手の力量をわかった上で、うまく立ち回っている。どこか、自分に通じるものがあると感じたノルンは、ますます彼女を気に入った。

「貴方、その吐息を凍らせることができるでしょ。それで、相手の鎧を一気に冷やして。後は、私が一撃で片づける」

「……わかりました」

アープは、会ったばかりのノルンを完全に信頼し、その指示に従う。

砂漠の熱気を吸い込むと、瞬く間に凍てつく冷気に変えて、兵士の鎧に吹き付ける。急速な冷却に、鉄器はもろくなる。そこをノルンはレイピアとわずかな接触で鎧を崩し、残りをアープに任せ、丘を越えていく。彼女なら、自分の戦い方をみて、意味を理解すると信頼しているからだ。さらに、エネルギー残量が残り少なくなり、

さらにもう一人の戦士がもつとも危なっかしいため、余裕がなくなっていることもある。

さらに丘を超えたところでは、アータルが相変わらず、自分の能力を全開にして戦っているが、呆れるほど戦略がない。力に任せて炎を起こし、相手を殴っていく。属性から行けば、一番相性がいいはずなのに……。

残り時間がないノルンは、アータルの背後に立つと、後頭部を殴りつけた。倒れ込んだアータルは、何が起こったのかわからずうろたえたが、自分を殴りつけたノルンを見つけると、完全に火がついた。能力通り、すぐ熱くなりやすい性格のようだ。

「あんた、不意打ちなんて卑怯な事をしてくれるわね。……、随分妙な姿だけど、あいつらの仲間なら容赦しないよ」

「黙りなさい。あなた、自分の能力をわかっているの。このまま戦えば、この兵士を焼き殺すことになるわよ」

「こいつらが攻めてきて、犠牲になった人もいる。構わないわよ」

「じゃあ、その仕返しに敵を討つ、つまり命を奪う意味をわかっているの。それがなければ、あなたもその『敵』の以下ね。本当の敵は他にいるのに」

「どういう事……」

「やり方は呆れたけど、お膳立てはしてくれたからありがたいわ。すぐにけりをつけるから、その意味を教えてあげる」

ノルンは、レイピアを連結させてツインランサーに戻すと、回転を加えて兵士の一団に投げつけた。槍は、鎧だけを砕き、人間の体を弾き飛ばしていく。熱で鎧が脆くなっている事もあるが、コスモブレスの力がはっきりと表れている。すべてが終わると、そこには砕けた鎧の破片が散らばっていた。だが、そこにあったのは鎧の鉄の部分だけではない。

砕けた鎧の破片がもぞもぞと動き始めたのだ。厳密に言うと、鎧と一体になっていた何かである。それらは、鎧の破片からはがれおちると、あちこちから集まり始め、まるで水銀の様に不定形な形で

あたりを転がりまわり出す。どうやら、鎧に代わって新たにとりつく物を探しているようだ。が、ノルンによってすべて鎧が破壊されたため、目当てのものが見つからず、右往左往している。

見た事もない光景、そして生き物の様なものを目の当たりにし、あつけに取られている。理解の範疇を超えた物の事をノルンに訊こうとしたが、ノルンはその質問を受け付ける前に、M87光弾を撃ち込み、不思議な液体金属を蒸発させた。そして、エネルギーを使い果たしたノルンは、再び人間体に戻ったが、体力の激し過ぎる消耗は、肉体に色濃く残り、膝と手を地面につけ、激しく息を切らせている。

「ちよつと、あんた大丈夫なの。姿も変わったみたいだけど……」
「少し疲れただけよ。姿が変わったことに関しては気にしないで。今は、この姿の方が楽だし、話しやすいでしょ」

「気にするなつて言われても、姿が変われば、普通は気にするよ」
自分の体を氣遣うアータルの姿を見てノルンは、彼女は熱くなりやすく、少年ばいやんちゃんな所はあるが、根はやさしいのだと察することができた。そう思うと、少しだけノルンも強硬な態度を解くことができる。

「さつきの姿が本当の姿なんだけど、デリケート過ぎて環境に好き嫌いがあるのよ」

「体が弱い」

「それとは少し違う様な気はするけど、そうとも言えるかも。ま、あなたに判断は任せるわ。それで、あなたが訊きたいのは、私の事じゃなく、あの生き物の事でしょ」

「あれって生き物なの」

「そうよ。金属に近い構造を持つ生き物、金属生命体よ。色々な奴らがいるけど、ちよつとユニークな奴らね」

「何だか、意味がよくわからないけど……」

「後で、面白い物を見せながら説明してあげるわ。それよりも、あの人たちを運ぶのを手伝って」

ノルンは、倒れている兵士の男達を指さしていった。彼らは相変わらず砂漠に横たわり、気を失っている。だが、敵を運べと言うノルンの注文を、アータルはすぐには了承できない。

「なんでよ。あいつらは敵だよ。砂漠に晒しとけばいいでしょ」

「まさか、あなたはそうやって処刑、いえ、私刑にしてきたの」

「それはしてないよ。あんたみたいに倒せなくて、追い払うのが精いっぱいだったから。でも、彼らに殺された人はいらる。その人たちのことを考えたら、助ける気になれない」

「動けない彼らを見て、何とも思わないの。それは、あなたの心から人の心がなくなっている証よ。その力を得た代償にね」

「この力の事を知っているの」

「意味は知らない。でも、どんなものかはわかる。そんな事よりも、傷ついて動けない人間を置いていく事が、あなたにはできるの。彼らの傷のほとんどはあなたの攻撃による火傷よ。嫌なら、私一人でやる。人じゃない者に触れさせたくないから」

ノルンの最後の言葉は、強烈なものだった。超人の力を持つアータルに対して、人ではないものと言うことほど、皮肉できつい言葉はないからだ。その言葉に対し、アータルは怒るのではなく、自分の感情や発言が、いつの間にか人から離れて、力に溺れ始めている事に気がつき始めた。自分が傷つけたものを砂漠に放置し、死に至らしめる。それが、村を救う者としてやっていい事なのかどうかを悟る事が出来た。そして、それだけの事を考え受け入れる人間性を彼女は持っていた。

「あんた、言いたいことははっきり言ってくれね。でも、白黒きつちりつけるその性格、嫌いじゃないよ」

「素直じゃない所、私に似ていて、何だか鏡を見ている様よ」

「私は、あんたみたいに綺麗じゃないよ。名前を切っていなかったね。何て言うの」

「ノルンよ。あなたは」

「アータル。わかったよ、そこにいる連中を運ぶよ。あれぐらいな

ら、それほど時間をかけずに村まで運べる」

「じゃあ、始めましょう。村に攻め込んだ兵士は全部、制圧したから」

「信じられない……」

ノルンの底知れない力に、アータルは先程までの噛みつく様な態度はなりを潜め、絶句して自分の隣にいる、黄金の瞳をした小柄な女性の姿を見つめていた。

アータルとアープ、ワルフの手を借り、敗北し、昏倒している兵士を村に運び込んだ上で、最初に村人に頼んでおいたロープで縛りあげると、ノルンは全員を倉庫に放り込んだ。

「とりあえずはこれでいい。しばらく頭を冷やして、落ち着いてもらったら、分別のある人間に尋問する。それじゃあ、あなた達に敵の事を詳しく教えてあげるから、広場に来て。そうそう、金属は外しておいて」

ノルンのテキパキとした指示に三人とも異論どころか、意見その物を言う暇もなく、ただ黙って従うしかない。勝気なアータルですら、反論できずにいる。ノルンに先導され、村の広場にいくと、そこで長老が彼女たちを待っていた。ノルンの元に駆け寄り、仰々しく頭を下げて、敬意を表している。

「ノルン様。指示通り、金属を外した上で鎧の破片を集め、その上に薪を積んでおきました」

「ありがとう。後、頼んでおいた、薪の下溝は」

「もちろん、抜かりなく」

「助かったわ。ところで、そんなにペコペコしなくていいわよ。やりづらいし」

「いいえ。あなたに救われた命は、一つではありません。今の私は、神よりあなたを信じていると言っても、過言ではありません」

神以上の敬意を持たれては、ノルンであっても照れ臭いらしく、

苦笑いを浮かべながら長老に自分の注文に応えてくれた事に新た得て礼を言つと、彼も立ち会いの上で村を襲った本当の兵士の実体の説明を始める事にする。

「それでは、これからあなた達に本当の敵の事について、話すわ。まずアータル、この薪に火をつけて」

ノルンの指示に、アータルは素直に従う。すでにノルンに気持ちで負けているのか、反論する気もないようだ。アータルの能力で、積み上げられた薪に勢いよく火が上がる。火にさらされた鎧の破片が、次第にぐつぐつと泡立ち始めるのを、アープとワルフが驚いた表情を見せ、互いにの顔を見合わせている。

「鉄が泡立って沸騰するなんて、初めて見た」

「俺もだ。ノルンさん、こいつは一体……」

二人の問いかけに、ノルンは二人の目線に立ち、炎で熱せられる鉄を指さしながら、わかりやすく解説して見せた。

「アータルには、さっき話したんだけど、これは生き物よ。金属生命体と言って、鉄の様な体を持ちながら、あちこちに移動出来て色々な形に変わる、そういう代物よ」

「では、この鎧、金属生命体を、あの兵士達の軍団は着用してたと言つことですか」

「それは少し違うわ、アープ。金属生命体も生き物だから、色々な種類がいる。今日の前にいるのは、自分達だけでは形を作れないから、鉄にくっついてようやく安定できる。わかりやすく言えば、柱がなければ、どんなに材料があつても家は作れないように、彼らも、固い鉄がないと形を作れない。だから、鉄器に喰らいついていたのよ」

「じゃあ、その鎧を着ていた兵士はまさか……」

「やつぱり、あなたが一番冷静で頭が切れるわね。そう、この鎧にくらいついた金属生命体の影響で、攻撃的になって、体も強靱になつていた。それだけの事よ。どこまで戦闘意欲があつたのかは知らないけれど、すべてが彼らの意思とは言えないはず。それを確認す

るために拘束して、倉庫に放り込んであるのよ。さあ、熱に耐えかねて、逃げ出してきたわ」

ノルンの言う通り、炎にあぶられてたまりかねずによりから離れた金属生命体は、ドロドロと薪の下に落ちて行き、そこに掘られた溝を伝って外に流れ出し、その先にある穴に流れ落ちていった。全員分の鎧を火にかけたため、次から次へと液体は炎から逃れ、穴にたまっていく。

「さすがに気持ちわりいなあ。だが、こんなものに操られたら、そりゃ正気じゃいられないな」

「そのとおり。正気なんてない。それが自分の意思でああなるならともかく、この生き物に強要されたとしたら、彼らの本当の意思を聞く必要があると思うけど」

「まったくだな。頭が下がる思いだよ、ノルンさん」

「まずは落ち着いてみる事よ。そうすれば、戦い方も変わってくる。一番馬力のあるあなたが先陣で相手の勢いを止める。その次に、一番戦闘向きの能力があるアータルが迎え撃つ。冷静で、水に能力を依存するアープは、村の守りを固め、いざという時には的確な指示を出す。そうすれば、今日みたいなヤバい状況には、めったにならないわ」

「恐れ入るよ。お、これで最後みたいだな、この薄気味悪い生き物は」

ワルフが穴に目をやると、最後の一滴が穴にこぼれ落ちた。中では、かなりの量の液体が生き物らしく動き回り、波打っている。何匹いると言うより、銀色の水たまりそのものが、グロテスクな生き物に見え、初めて見るアータル達三人は、顔をしかめながら奇妙な生き物を見る事を余儀なくされる。逆に、未知の生き物に出会う事に慣れきっているノルンは、気に留める事もなくいつものもの調子で解説を続ける。

「この生き物は、この星にいる生き物じゃない。偶然か、誰かの意図かはわからないけれど、この周辺に紛れ込み、鉄を多く持つ所に

潜んで、鎧にとりついた。わからないのは、兵士が暴れ回ったのが本当に操られただけなのか、それとも、元からあった闘争心を掻き立てられたかね。或は、深層心理にある何らかの欲望……。理由はどうであれ、こんな物騒な物を放っておくわけにはいかない。あなた達にも、捕虜たちにも受け入れ難いものよ」

ノルンは立ち上がると、ライブブレスレットに手を添え、シャインブラスターを召還した。ノルンの左手に握られた銃は、銀色の輝きを持ち、ノルンの装着品らしく美しい装飾品のような外観を持っている。ノルンは、自分が望むわけではないのに、外観の美しい装備品を渡される事が多い。そして、それが似合ってしまったため、余計に他の者より外観に力が入った装備品を面白がってまわそうとする者もあらわれる。

その例にもれず、レプリカやインテリアにした方がいい様なシャインブラスターを左手に持ち、穴でうごめく銀色の生き物に、エーテル封入された銃から光波ね熱線を発射した。空気の壁が辺りにいた者に当たり、その衝撃を思い知らせることになる。穴の中で白い煙が上がり、それが晴れた時、あの気味の悪い生き物は跡かたもなく蒸発しているのが見えた。ノルンは銃をブレスレットに収納し、離れた所で様子を見守っていた村長に、すべてが終わった事を告げる。

「村長、すべての処理が済みました。まあ、今の所ですけど。捕虜は、意識がしっかりするのは日が暮れた頃でしょう。それまでは、みなさん問題なく過ごせますよ」

「ありがとうございます。もしよければ、私の家でお休みになつて下さい。食事も用意しますので。我々全員のお礼です」

「お気遣いありがとうございます。ですが、貴重な食料をいただくわけにはいきません。気持ちだけで結構です」

「いえいえ、それでは、命の恩人に対する礼儀にそむきます。何とか、我々にできる事を」

「そうですか。……、うーん、でしたら、一つだけお願いできます

か」

「なんなりと」

「おいしい水を……。そうそう、酒と言うものを頂ければ」

村にオレンジ色の夕日が射し、人々の動きも忙しくなってくる。

夜になれば、星と月の明かり以外の光は亡くなり、真っ暗になる。

日暮れ前にできることを終わらせようと、自然と人の動きも慌ただしくなる。ノルンは、何もしないでいるのも気後れし、何か作業を手伝おうとするが、恩人であり客人の彼女にそんな事はさせられないと、断られてしまう。かといって、忙しく働いている人々の間で伝っているのも居心地が悪く感じるだけの神経はあるため、仕方なく農作業の様子を見に行った。

水が確保できるため、主食になる麦が栽培でき、刈り入れのシーズンのため美しい黄金色の穂が風に揺れている。夕日に照らされ、さらに輝きを増す光景は、ノルンの心を打つのに十分の美しさを持っていた。

「本当にきれい。ここが、命の糧を育む場ね……」

食物を摂取する必要のない種族のノルンにとっては、農業や耕作地を見る機会がない。人間にとっては当たり前前の光景も、彼女にとっては一生の思い出になる価値がある。目の前に広がる交易に見とれたノルンは、その場に座り、しばらく眺めてみることにした。

たくさんの人々が、麦の借り入れを行っている。肩に担いでいる稲穂が、揺れる度にきらきらと金に輝く。それを繰り返す人々は、汗を流し疲れも浮かんでいるが、生き生きとした顔をしている。麦畑の向こうには樹木が植えられ、そこではオリーブやブドウの実がなっている。子供や老人がそこを担当し、各々が持ち運べるだけの身をかごに入れて、村へ運び込んでいく。

ノルンの目に映るのは、重労働ではなく、明日の命を繋ぐための糧を生み出す営みである。こんな体験ができると知ってから、ノル

ンは旅をするという事に以前とは違う生き甲斐すら感じるようになっていた。そして、そこで経験した事が自分を成長させ、人と交わることで新しい世界が広がっていく事に、以前よりずっと敏感に感じる事ができる様になっていく自分を見つけることを嬉しいと感じるようになってる。

飽きもせず、ずっと農作業を眺めていたノルンは、後ろをひ血が通ರಿかかった事に気がつかなかった。

「そんなに百姓仕事楽しいかい、ノルンさん」

「あ、ワルフ。いたんだ」

「あんたほどの戦士が気がつかないなんて、よっぽど熱中しているんだな」

「うん、ちょっとね。感動した」

どこか変わっているノルンの反応に、ワルフは思わず嘖き出したが、決して馬鹿にしているわけではなかった。どちらかと言えば、普段自分達が何気なく生活の一部として行っている行為を、旅の途中に立ち寄った女性が感動しながら眺めているのを思うと、どこか照れ臭い思いが強い。微笑むワルフを後ろで、女の笑い声が聞こえ、ノルンは後ろを振り向き、挨拶をする。

「ごめんなさい、気がつかなくて。その、この場合どんな言葉が、……、あ、お疲れ様です」

「ありがとう、ノルンさん。ワルフ、ノルンさんと話があるなら、先に帰ってるよ」

「おお。すぐに俺も帰るよ」

ワルフは、農具と収穫物を背中に担ぎながら村へ歩いていった。

ワルフは、ノルンの隣にしゃがみこみ、同じように畑を眺め始める。「いいの、あの人は奥さんじゃないの」

「いいさ、遠慮しなくて。あんたは村の恩人だ。やきもち焼く対象じゃない」

「そついうつもりはないけど……」

「気は使わなくていい。それに、まだあいつはカミさんじゃないし。」

いや、できないからな」

「それは、あなたが戦士だから」

「大体、そんな所か」

三人の中でいちばん延長のワルフは、戦いにおいては思慮が浅い部分があるが、こうして会話する分には、人生経験が長い分、一番落着いて話ができる相手だと、ノルンはそんな印象を持った。彼からなら、色々な事を聞きだせるかもしれないと思い、しばらく話を続けて見ることにし、知りたい事を質問していく。

「三人の力は、元々備わっていたものじゃないわね」

「ああ。おとぎ話みたいなもんさ。砂漠の民に危機が訪れる時、三人の戦士の魂が現われる。火、水、風。大地で生きる者に与えられる力を宿し、災いを振り払う、ってな。けどな、いつ、どの民にその力が来るのかわからない上、どんな奴に魂が宿るのかもわからないんだぜ。村を守る力が必要なのはわかるが、これはいくらなんでも行き過ぎだ。正直、貧乏くじだな」

「そう思うのも無理はないわ。自分が望まない、欲しいものと違う力を持ったら、戸惑いと違和感で板挟みになる。そうして生きていくのは楽じゃない」

ノルンには、ワルフの思いが理解できる。それは、かつての彼女もそうだったからだ。母のような慈愛と癒しの力に憧れていたのに、彼女が受け継いだのは、父の戦士としての力。もちろん、父の事は尊敬していた。だが、憧れていた母は幼い頃に死別したことで、憧れた力はいつの間にかノルンのコンプレックスへと変わっていた。望んだ力と相反する力の違和感を振り払うために戦い続け、やけくそになりかかっていた時に、母と同じ光を持つ存在と出会い、あえて無視していた彼女の中に眠っている力の存在を気がつかせてくれたことで、長いトンネルから抜け出したのが最近の事だったため、ワルフの戸惑いが手に取る様にわかった。

「ノルンさんもそうだったみたいな口調だな」

「ええ。自分では実感していないけど、その頃は男みたいな口調で、

キレると口より先に手が出ると言われてた」

「今だってそうだろ。村の若い奴を締め上げたって聞いたぜ。ま、俺は今もそうだし、昔もそうだった。血の気が多くてな。無理やり、野良仕事を手伝わされているのに嫌気がさして、喧嘩ばかり起こしていた。生きる場所に納得いかなかったのと、発散できない力の持つて行き場がわからなくてな。で、自棄を起こして、仲間と一緒に砂漠を横断しちまった。今、思うとぞっとするようなバカげたことだ」

「よっぽど、この村の生活が嫌だったのね」

「うーん、少し違うな。考えてもみてくれ。200人足らずのオアシス周辺の村で生きていくとなったら、生きる道は限られている。大抵の奴は、それが当たり前と思って不満は持たないが、俺はひねくれていたのか、ガキの頃に聞いたおとぎ話をいい歳して信じていたのか、まだ自分の知らない世界や道があると真に受けていた。だから、それを探して砂漠を渡るなんて命知らずな事をしたんだ」

「あなた達の体なら、この日差しと高温と乾燥には耐えられないでしょうね」

「ま、そういうことさ。運よく砂漠を横断して街やかい都市にも行ったけど、やっぱり、ここの生活が性に合っている事にようやく気がついた。働いて、物を作って、食って、クソして、そして寝る。一番楽だと思うし、面倒だとも思うし、よくわからないが、そういう事だ」

「つまり、故郷が一番ってことね」

ノルンにとってもそれは同じ事だ。気持ちに余裕がなかった頃は、故郷に近づくのも避けていた。任務を終えれば次の任務を受け取って、さっさと赴任地に向かう事を繰り返して、故郷にいたことなど稀になっていく。だが、旅立つ度に無意識に故郷の景色を眺めて記憶に焼きつけ、貴重な体験をした後では、自分が体験した事を同胞に伝えるために、早く帰りたいとまで思うまでに変化していた。やはり、ノルンも故郷の事を愛していたのだろう。ワルフも、ノルン

の言葉に笑いながら相槌を打っている。

「本当に馬鹿だよ。砂漠の横断なんて命知らずな事をして得た答えが、『家が一番いい』なんだからな。まあ、その後は真面目に働いたよ。腕っ節もいいから、みんなに重宝されるが、それまた気分がいい。必要とされているんだなって。そして、さっきいた女ともいい関係になつて、さあ結婚だつていう時に、訳のわからない力を手に入れて、戦いに駆り出されて。昔のつけが回ったかな」

「何かしらの意味があると思う。もっとも、それは私にはわからない、あなただけの意味だけだね」

「意味がなきゃ困るよ。結婚したつて、こんな力を持った男の子どもなんて、怖いからな。向こうの家族にも悪いから、結婚は控えているんだ。しかし、この髪の色はやめて欲しい。褐色だった髪が、日射しみたいに金色になっている。目立って嫌なんだよな」

「私のもう一つの姿は、目立つなんてものないじゃないみたいよ」

「そりやそうだろう。今の方がいい女に見えるぜ」

「今の言葉は、一応セーフね。アータルとアープにも、戦士になった理由や、色々な過去があるんでしょね……」

「まあな。俺から、ベラベラ喋る事じゃないから、黙っておくよ。ところで、そろそろつかめた男どもに話を聞くんたる」

「ええ。悪いけど、アータルとアープを呼んできてもらえる。家を知らないし」

「わかった。倉庫で待っていてくれ」

ワルフは、そういつて立ち上がり、村へと歩いていった。ノルンは、もうしばらく農作業の風景を眺めた後に、もう少し見ていたいという素振りを見せながら、村へ帰っていく。

歩いている内に日が暮れて、次第に辺りが薄暗くなっていく。ノルンは、約束していた倉庫の前に辿り着き、村人と軽き会釈しながら三人を待っていると、やがてアータル達は揃って倉庫に向かってやってきた。兵士と顔を合わせるが気に入らないのか、アータルはかなり不機嫌だ。そんな彼女を、穏やかな性格のアープが何とかな

だめているが、ノルンはあまりそこには触れず、尋問を始めるべく倉庫に入ってしまった。

豊かな農産物を入れる場所だけに、数重員の兵士を入れておくには十分な広さだ。そこに縄で体を拘束された兵士がごろごろ転がっている。ノルンは彼らを見回すと、

「指揮官は誰だ」

と、強い口調で叫んだ。女のノルンに、きつい口調で叫ばれた男達は、戸惑いざわついていたが、うつすらとノルン一人にねじ伏せられた事がうつすらと脳裏に残っていたため、すぐに静まり返り、押し黙ってしまった。しばらくの間、静まり返った時が流れたが、やがて一人の兵士が、

「私が指揮官だ」

と、名乗りを上げた。彼は、自ら前に進み出ようとしたが、鎧によつて体を無理やり動かされていた反動が残っていて、足元がふらつき倒れ込んでしまった。ノルンは彼の元に駆け寄り、穏やかな口調で、

「無理はしなくていい。ただ、話を聞きたいだけだから」

と、語りかけ、肩を貸してやり、前に移動させた。ノルンの言動に、指揮官を名乗る男はすっかり敬服し、その目には敬意が宿っている。「あなたは、女性でありながら、とても気高い戦士の目をしている。よろしければ、お名前を聞かせていただきたい」

「私はノルン。戦士には変わりないけど、この村の人間ではない。」

ただの旅人よ。あなたの名前も聞かせてもらえるかしら」

「バーガルと申します。この師団を指揮する者です……。すみません、砂漠で喉をやられていまして」

バーガルは、激しくせき込みながら、その非礼を詫びている。乾燥し、高温の砂漠を移動し、激しい戦闘をしたのだから、生身の体には相当こたえているはずだ。喉も激しく乾いているだろうが、そんなつらさは表に出さないように努めている彼に、ノルンはすっかり感服してしまった。

「あなたのような人物の許についた彼らは、幸せよ。アータル、この人に水を運んできて」

ノルンは、尋問をする前に、喉の渇きに耐える目の前の男に、水は与える必要はあると考えてた。だが、アータルは、激しい気性をここでも見せ、ノルンの注文にも反抗する。

「何で、村を攻めてきた非道な連中に、施しをする必要なあるわけ。こいつらにやる水なんて、一滴もないわ」

「渇きに苦しむ人から水を取り上げるのが、人の道とも思えないけどね。あなた一人に水の価値を決める資格はないでしょ」

「あんた、敵を倒したからって、少し出しゃばり過ぎよ」

ひたすら反抗し続けるアータルに、ノルンは正面から付き合う事はないが、短気な感所に自分を重ね合わせ、苦笑いを浮かべている。だが、恩人であり客人であるノルンに対するアータルの態度にあわてたアープは二人の間に入り、必死に謝罪し、間を取り持とうとする。

「アータル、少し落ち着きなさい。……、すみません、ノルンさん。この子は一番年下で、分別なく反抗してしまいましたが、悪気があつてのことじゃないんです。水は、私が持つてきます」

「わかつてるわよ、アープ。あなたも大変ね……。それじゃあ、水はお願いね」

「はい」

アープは、銀色の髪をなびかせながら、小走りで駆けだしていった。その後ろ姿を見送ると、ノルンは、バーガルに対する尋問を始めることにする。

「それじゃあ、バーガル。しばらくの間、私と話をしましょう」

「わかりました。協力いたしますので、部下達の命は保障していただきます」

「殺すつもりなら、ここに放り込んでおくように指示したりしないわ」

「それも、あなたの指示でしたか。恐れ入ります」

「私だって、戦士だからね。それじゃあ、訊くけど、あなた達はどうしてこの村に攻め入ったの。ろくに武器もない場所に、鉄器で押しいるなんて、心に余裕のない暴力よ」

「仰るとおりです。ただ、複雑な理由がありますが、目的は単純です。水が欲しかったのです」

ノルンはあまりにシンプルな答えに最初は戸惑ったが、あらゆる星を巡って得た経験と豊かな知識によって、その事情を理解した。このような高温で砂漠化が進む星で、水は生命体にとって命そのものであり、生死に直結する切実な者になる。広い宇宙には水のない環境で完全に適応し、場合によっては水そのものを拒絶する者すらいるが、ほとんどの生物は水なしには生きていけない。バーガル達の侵攻の理由が水だとすれば、それはそれで筋が通っている。

「水ね……。穏便に話をつける気はなかったの」

「まともであれば、そうしたでしょうが、あの鎧をつけてからの事はよく覚えて居りませんし、戦いの事以外に頭が働いていませんでした。ただ、水を奪えと言う声に従って行動していました」

「命令する者がいたと言う事ね」

「はい。我々の將軍です。我が国は、水が枯れ、不毛の土地となり、渴きと飢えの中にあります。故に、水の確保は命懸けの問題でした」
「だからって、人の村に攻め込んで、無理やり奪っていい事にはならないだろ」

ワルフは反論するが、アータルに比べてゆとりがあるのは歳の巧と言つか、色々な経験を積んでいる分、物を考えたり、人の話を聞く余裕があるせいだろう。バーガルは、その意見を認め、反論することなく、彼らの事情を打ち明けていく。

「ごもつともな意見です。ですが、我々の国の水の枯渇は深刻です。もとはと言えば、それは自らが招いた結果でもあります。我々の国には、鉄を生産する技術があり、それによって力をつけて参りましたが、他国には干渉しない立ち位置でした。しかし、鉄の生産には火が入ります。火を起こすには木が必要です。その結果、大量の木

が伐採され、砂漠が国に入り込む結果となり、水が枯れた不毛の土地になっていきました。結果として、水を求めて他国や周辺の集落と取引をせざるを得ません。このような状況になったのは、私が子供の頃のことです」

「なるほどね。水がなければ人は生きていけない生き物だから、そこは理解できる。それでも、あくまで、周りとは取引だったんですよ」

「はい。先王は決して力に任せて攻め入ってはならぬ。それをすれば怨恨の種をまき、種が芽ぶいて育った時、怨恨は自らに降りかかると言うお考えでした。そこで、特産となる鉄と引き換えに水を得ていたのです。ただ、最初の内はうまくいきますが、水と違い、鉄はすぐに飽和します。そして、製法も伝わってしまい、価値がなくなっていくます。そうなると足元を見られ、物々交換が成り立たなくなります。そうなると、武力を使つてはならないお達しがありますから、他の国や集落に向かう事になります。この村にも取引に訪れた事もあるとききました」

「へえ、それは意外ね。ワルフ、あなたは聞いたことあるの」

ワルフは、戸惑った表情を見せたが、記憶の糸を辿っていくうちに、何かを思い出したような表情を見せた。

「ああ、じい様やばあ様からガキの頃に聞いた事がある。昔、この国に鉄はなくて、百姓仕事にえらい苦労していたらしい。その時、鉄を売る一団が来て、この村に鉄を分け与えて、その代わりに水が欲しいと言う事で、それからしばらく交流があつたそうだ。ここは低地で緑もあるから、掘れば水は出てくる土地だ。それで、感謝の気持ちを込めて、食料も渡していたそうだ」

「その通りです。この土地の人々は、非常に心が広い方々で、水だけでなく、捕れた農産物まで分けていただき、そのおかげで国も立ち直りかけ得たのですが、事情により、その良き関係も終わってしまいました」

「それも聞いているよ。確か、新しい井戸を掘っている時に、岩に

ぶつかってしまつて、しばらくこの村も水枯れの状態が続いたんだ。それで、食料も分けてやれなくなり、最後には、水の取引をやめてしまふ事になつたてな。だが、その後に、伝えられた鉄を使つて、根気強く岩盤を削つて新しい吸いみや気を見つけたんだとよ。じい様達は、伝えられた鉄で命を助けられながら、恩人に対して申し訳ない事をしたつて、悲しそうな目で話していた……」

「それで、ただの旅人の私に対して、昔の負い目もあるから、恩人を厚遇してくれるわけね。過去の事情はわかつたわ、バーガル。でも、そんな節度ある国だつたあなた達の国が、暴力に訴えて、あんな鎧を着て周りの集落を襲い始めたのはなぜなの」

ノルンの問いに、バーガルは視線を落とす。その目は、深い悲しみを帯び、彼の心の中に抱えきれない重しがある様に、ノルンは感じた。だが、バーガルは深く息を吸い込むと顔を上げ、ノルンの目をますぐに見て口を開いた。

「我らを呪縛から解き放ち、このように礼を持って接していただくあなたならわかつていただけると確信し、お話します」

「わかつたわ。話を聞きましょう」

「方針が変わつたのは、先王が亡くなつた時です。飢饉に加えて、流行り病が国を襲い、大勢の者が亡くなりました。体中にできものが噴き出て、高熱で死んでいくのです。ひどい有様でした。私の親もそれでなくしております。病により王が倒れた後、残されたのは女王と幼い王子。王子に王位は継承されましたが、国を治めるには無理があり、側近が支えていく体制が取られました」

「色々な歴史を学んだけど、その状態が一番危うい。誰に権力があるのか、わからなくなる」

「その通りです。側近の間で意見がまとまらず、收拾がつかなくなつた時、台頭してきたのが、我ら軍人をまとめる將軍、エーシユマです。決断できない墓の側近を押さえ、決断力を基に幼き王と女王の信任を得た將軍の基に、一応は国はまとまりましたが、それと言つて飢餓と水不足が解決するわけではありません。結果として、と

うとう武力行使に……」

「でも、王の名のもとに信任されたわけでしょ。先王の意思とかけ離れたその政策に、王と女王は反対しなかったの」

「お二人は、幽閉されました。後から知ったことです……」

予想以上のバーガルの国の惨状に、憎しみに凝り固まっていたアータルですら声を失い、静かに目を傾けるしかない。ノルンも学んではいるものの、その歴史の一瞬に立ち会ったことはないため、何とも言えない気持ちになっている。だが、まだ聞かねばならない事があるため、バーガルの告白に耳を傾け続ける。

「反逆行為に気がつかなかった我々に、例の鎧が支給されました。最初は違和感を感じなかったのです。不思議と体が軽く、少し気分が高揚する程度でした。しかし、砂漠の行軍に平然と耐え、いざ戦闘になると、経験したことのない興奮に我を忘れていました。それから、ふと我に帰ると、そこにあるのは破壊された建物と、逃げ遅れ、我々の手で殺された人々の死体……。気が狂いそうでした。そして、自分達を狂わせたのが鎧だと知り、急いで脱ぎ捨てようとしたが、自分では脱げないのです。將軍の声がないと脱げないのです。その日から、我々は物言えぬ人形になり果てたのです」

「逆らう事も、逃げ出す事も出来なかったの」

「はい。互いに見張り合い、一区画ごとに一人でも脱走したら、その区画全員が皆殺しとなるのです。最近では、女子供は隔離され、人質に取られる有様」

「なるほどね。それにしても、その將軍もやってくれるわね。どんな脳みそからそんな悪意が湧きでてくるのか」

「昔は、あのような方ではなかった……。先王の信頼に応えるだけの器のある方でした。王の優しさと、將軍エーシュマの力と勇氣、それで成り立っている国でした。皆の尊敬を集め、そのたくましい腕で民を守ってくれる、そんなお方がなぜあのような事に……。ですが、このような事になっても、民は將軍を心のどこかで信じているのです。何か訳があるのだと信じ、見放せないのです」

「そう……。かつての姿がどんなものか、あなたの目と、その誇りある態度を見ればわかる。ところで、そのエーシュマも鎧を着ているの」

「はい。目にする時はいつも着用しています。……、まさか」

「この目で見ないと、断言できないわ」

ノルンは一旦話を切り上げ、アータルとワルフを呼び寄せ、バーガルに訊かれないように小さな声で話し合う。

「大体の事情はわかったわね」

「ああ。どうやら、親玉はその將軍らしいが、そいつも鉄の化け物に操られているみたいだな」

「アータル、わかったわね。あなたが本当に戦うべき者が誰なのか」

「わかったわよ、わかつてはいるけど……。この村の人を少なからず殺したあいつらを許せない」

「おめえも頑固な奴だな。仕方ねえけど、俺たちだって、一步間違えば、あいつらになっっていたんだ。鉄の化け物か、伝説の戦士かの違いしかない」

まだ、わだかまりを沸騰させているアータルに、ノルンもワルフも呆れている所に、アープが水を瓶に入れて運んできた。ノルンが予想していたより多いのだが、そこがアープらしいと言える。

「ノルンさん、水を運んできました。これぐらいいいですか」

「十分よ。多すぎるくらいだけど。さあ、バーガル。喉が渴いている所、長話をさせて悪かったわね。水でも飲んで」

「いえ、私はいりません」

バーガルはきっぱりと断った。歌がっているわけでもなく、意地を張っているわけでもないが、口を真一文字結んで、言葉通り、飲む気はないらしい。戸惑ったアープが、

「大丈夫ですよ、毒なんていれていませんから」

と、付け加えるが、それでもバーガルは首を横に振って、拒み続ける。ノルンも妙に思っ、バーガルに真意と問いかけてみた。

「何もそこまで維持を張らなくてもいいんじゃないの。毒入りだと

思わせるなんて、失礼だと思うけど」

「いや、決してそういうわけではありません。出来れば、その水は先に部下に吞ませてやって欲しいのです。いえ、そうでなければなりません」

「へえ、随分気がいいのね」

「彼らは一般兵。自分の意思より上官からの命令を優先します。私の指揮でここに攻め入り、捕虜となったのはですから、彼らの責任はすべて私にあります。それにも関わらず、部下の苦しみをよそに私が先に水を口にする権利はありません。同化、その水は彼らに先に与えてやって下さい」

「……、気にいった」

ノルンはにやりと笑うと、バーガルを縛っている縄に手をかけ、僅かに力を加えるだけで引きちぎってしまった。戸惑うバーガルに、ノルンは微笑みながら話しかける。

「自分の命より、部下の身を案じ、全責任を負う。敵地で捕らわれて、超人に囲まれながら、決して臆せず、己の意思を曲げない。その心意気、気に入ったわ。あなたを信じる」

ノルンは、水瓶をバーガルの部下に与えるべく手に取った。彼の意思を尊重するためだ。だが、ノルンが手にした瓶に飛び付き、床にたたき落とした。割れた亀から水が飛び散り、乾いた床にあつという間に吸い込まれていく。アータルの目は、悲しみとも怒りともつかない感情で覆われ、目から涙がこぼれている。

「私はあなた達を許さない。私の両親は、あなた達に殺されたのよ。仕方なかったですむわけないでしょ」

「済むわけがないのは、彼らもわかっていているわよ」

「ノルン、あんたは黙っていなさいよ。ただの旅人の分際で、この村の事にしゃしゃり出ないで」

「そうね、あなたの言う通り。……、わかった。じゃあ、好きなだけ暴れなさい。彼らを殺したいなら、殺しなさい。気の済むまでね。あなたにはその力がある」

ノルンはあっさり身を引いた。アータルは躊躇せず、その手に炎を起こし、バーガル達に向けて発射しようとする。その目には、本気で殺意がこもっている。炎が手から放たれようとした瞬間、アープは、床に吸い込まれた水を引き戻し、アータルの手の炎を消した。そして、ワープはアータルに掴みかかり、彼女の顔を本気で殴り飛ばした。そして、彼女に馬乗りになって、もう一度殴り、怒鳴り声を上げる。

「てめえ、ガキだと思って放っておいたが、これ以上黙って見ている訳にはいかねえ。あいつらの話を聞いて、まだわからないのか。あいつらだって、好き好んでやった事じゃないんだ」

「そんな理由で、父さんも母さんも殺された事を許せって言つの。そんなの絶対できない」

「あいつらだって、家族を人質に取られているんだ。逆らえば殺されるんだぞ。少しは理解してやれ」

「絶対に嫌。じゃあ、私の両親は死んで当然だって言つの」

「そういう事を言っているんじゃない。今、この場でこいつらをお前が殺してみる。お前の気はいくらかは張れるだろうさ。だが、こいつらの女房や子供はどう思う。お前の事を魔女、火の悪魔、そう言うんだぞ。つまりこういうことだ。お前があいつらになるんだ。

あいつらの家族がお前になって、魔女を殺すために追い続けることになる。もう、ガキと言えない歳になるんだ。それぐらいはわかれとは言わないが、少しはその頭で自分で考えろ」

「私が、魔女……」

ワルフがアータルの体の上からどくと、彼女は茫然とした表情で立ち上がり、外へ駆けだしていった。ワルフは、ばつが悪そうに頭を掻きながら、

「あんた達に、みつともねえところ見せてしまったなあ。水は、俺がまた持ってくるよ、全員分な。……、バーガルさん。俺も完全には許せねえが、あんたのことは理解できそうだ」

と、照れ臭そうに言うと、足早に井戸へ走っていった。その姿を笑

いながら見ているノルンのそばにアープが歩み寄り、彼女も少し笑っていた。

「ワルフって、いい人なのに、照れ臭くて外に出さないでいるんですけど、今は珍しく私がいる前であんな事を言うなんて」

「いい奴だっけ言うのは、わかりやすすぎるくらいよ。殺気はアータルを止めてくれてありがとう。私が言ってもよかつただけだね、その後が大喧嘩になるのがわかってるから……」

「ノルンさんも止めてくれるのはわかっていました。アータルに大事な事を気がついて欲しかつたんですよ。彼女の気持ちもわかるけど、バーガルさんやその国の人の事情もわかったら、何も言えなくて。この村も、あの人たちが望まない戦いに駆り出されている原因の一つだっけ聞いてしまつて」

「世の中、善悪二つに分かれるわけじゃないからね。白黒はつきりつけばいいんだけど、そうじゃないから生きやすいのかもしれない」

「私にはまだ、そういう事はわかりません。でも、世の中がそんな風にできているって言うのが、見えた気がしました。私も、水を汲んできます。ワルフ一人じゃ運びきれないから」

「お願いね」

アープも足早に倉庫から出ていくと、倉庫の中には静寂が漂った。ノルンがふうつとため息をつくとき、バーガルが重苦しい声で話しかけてきた。

「ノルン殿。私は、あの少女に殺される事を覚悟しました」

「武人のあなたなら、いつもその覚悟はできているでしょ」

「そうではありませんが……。先王の言葉が思い返されます。怨恨の種をまけば、それが芽吹き、いずれ自分達を襲う。これは、我々が撒いた怨恨の結果なのでしょう」

「そうでしょうね。そして、この村の人も、無意識に怨恨の種をまいていた……。誰かがその事に気がつき、芽を摘み取っていかなければ、悲劇は終わらない」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5190z/>

女神と戦士と旅人と journey of norn

2011年12月19日08時58分発行